

古代歌謡の解説

第一部 安萬侶の表記法についての意見

『古事記』⁽¹⁾の序文の中で、太安萬侶は次の意見を述べました。

SK 73⁽²⁾

(1) 已因訓述者、詞不逮心。

(1) 已に訓に因りて述べたるは、
詞心に逮ばず。

(2) 全以音連者、事趣更長。

(2) 全く音を以ちて連ねたるは、
事の趣更に長し。

(3) 是以、今

(3) 是を以ちて、今

(4) 或一句之中、交用音訓、

(4) 或は一句の中に、
音訓を交へ用ゐ

(5) 或一事之内、全以訓録。

(5) 或は一事の内に、
全く訓を以ちて録す。

W・コタンスキ

「小学館『日本古典文学全集 古事記』による読み下し」

表面上、簡単な文句にすぎませんが、分かりにくい箇所もあります。

まず第一に、以上の(1)の語句には、「ことごとく漢字を訓読することにして、その漢字によって記述すると、漢字本来の意味とわが国のことばの意味とが一致せず、十分に意を伝えることができないことがある。」という中身があることは疑いありません。

それから、(2)の語句の「音をもつて連ねる」というのは、例えば、「またまで」を「麻多麻伝」と書き、「やくもたつ」を「夜久毛多都」と記す類で、字義の如何にかかわらず、ただその文字を借りて国語を写す方法を言います。この方法を採用するときは、文章は非常に長くなって、これはまた不便であると言うのであります。

(3)は、(1)と(2)の内容に対して見地を異にする前触れのように、

「それゆえ、ここでは……」または「以上の情況に対抗するには、これからは……」云々と訳すことができます。

かくて、欠点克服の予防手段として安萬侶は、何の工夫を提出したのでしょうか。(4)と(5)の文句を読むと、次のような意味が明らかにできそうです。「ある場合は一句の中に音と訓を混じえて用い、ある場合は一つの事柄を記すのに、すべて訓を用いて書くことにしました。」と、『日本古典文学全集 古事記』(小学館)から読み取ることができます。ところが、筆者の見解によれば、以上の解釈は、安萬侶の意見の核心には触れず、欠点は正のヒントを与えてくれません。同句の解釈をそのままにしておいては矛盾だけがのこり、解釈者の誤解によって、無罪の安萬侶は、世間の物笑いになってしまいうようでもあります。そこで、一貫性のないことが掲げられた上記の安萬侶の語句の断片は修正すべきであろうという結論が起こつてもよいでしょう。

思うに、安萬侶は、八世紀の宮廷のためにその序文を拵えたので、問題の委曲を尽くすことは無理だったに相違ありません。安萬侶の心配事であった漢文を全く異なっている表記体系に改造することは、極めて錯雑なもので、宮廷の人間はそれを了解できなかったでしょう。だからこそ安萬侶は、(1)と(2)の句のある程度相反する内容つまり中身を意表を突いて漏らすような形で表現しようとした。

一方において、(1)「……その漢字によって記述すると、漢字本来

の意味とわが国のことばの意味とが一致せず……」に対し(4)「一句の中に音と訓とを混えて用い……」と断言し、他方においては、(2)「音を借りて国語を写すときは、文章は長くなる」に対し(5)「一つの事柄を記すのに、すべての訓を用いて書くことにした」と表明します。(2)と(5)を比べると、はっきりと一貫性が見えるのです。音を借りて書くのが不便だから、訓だけを使う方がまざっているというその結論には根拠があるのでしょう。

それと無関係ではない(1)と(4)を対照すると、漢語と和語の意味が一致しないにもかかわらず、一句の中に音と訓を混えて用いるのが予防手段になるという論証はありそうもないようです。誤解を招くことを安萬侶の所為にするのは、安易な姿勢だと筆者は思い、むしろ故意に言い落とした無口な態度の中身がここにあると思っています。すなわち(4)と(5)の句を注意深く読めば、訓読は知らぬ間に優勢を得て、音読は殊更に扱われず、一クラス下げられているように感じられるのです。

もう一つかなり無口な態度で扱われたのは、「交えて」ということであると考えられます。この「交えて」は、現代日本語では「いっしょになかに入れる」(『例解新国語辞典』による)、「いわば空間的に解せられるもので、上代日本語では「異質の二つのものを交差・交錯させて一つにする」(『岩波古語辞典』による)と説明されるので、それは質的な立場を表わす見解であります。この辞書の言う

「異質のもの」が、ここで仮定的に音・訓読みの現象であると考えたと、「一つにする」という要請の結果は、間違いなく、声調なのであります。すなわち、音仮名と訓仮名とは『古事記』の本文の中で組み合わせて初めて働くもので、両方と同じく音の高低のちがいによるアクセント（声調）をもって、それによって一つの言語共同体として統合されたと思われます。

さらに言及せねばならぬここで安萬侶によって寡黙のままになされたとした報告は、すでに昭和五十四年（一九七九）に西宮一民氏が新潮日本古典集成の『古事記』で伝達できる形にまとめているので、氏の解釈を受け入れるつもりです。すなわち(5)「全く訓をもつて録す」という言い回しは、西宮氏によれば、訓専用の法を示しているが、具体的に変体漢文体を用いることを意味すると認めるべきでしょう。

以上の S.N.E. の引用全文は、結局、次のような自由な現代語訳の形で表示することができると思います。

(1) ことごとく漢字を訓読することにして、その漢字によって記述すると、漢字本来の意味とわが国のことばの意味とが一致せず、十分に意を伝えることができないことがある。

(2) 字義の如何にかかわらず、ただその文字の音を借りて国語を写す方法を採用するときは、文章は非常に長くなって、これはまた不便でありそうだ。

(3) 以上の情況に対抗するには、これからは、

(4) 一方では、一句の中に音と訓とを問わずに用いようとするのだが、各音節にかぶさっているはずの声調についても、注意を適当に向けるので、原文のことばの意味がこれで保存されることが望まれる。

(5) 他の一方では、一つの事柄を記すのにすべて原則的に訓を用いて書こうと努めるのだが、事実上、漢字の文章「純粹の漢文、あるいは変体漢文体」は日本式の訓読体「（全く訓を以ちて）」という読み方を応用しながら、内容を把握することができるといえる。

以上の要点をかいつまんで言うると、前述の変体漢文体という表記方法は、『古事記』全体の骨組みを為して、『古事記』の全構造の研究にとっては、残りの文の構成分子をもささえる中央部分であるに違いないのです。それらの構成分子は漢文ではなく、漢文の中にはめこまれた和語を表わす音仮名・訓仮名や音訓仮名で、その混用であります。

けれども、これくらい提言が安萬侶の書いた序文の中に含まれていると認めても、それでは、一見してすぐに分かる外側をなでただけで、我々には理解の深みはまだありません。思うに、安萬侶は意識的に以上の説明をそのままに放置しておきました。まず第一に『古事記』の本文を誤りなく間違いを生まないようにまとめるという命令を戴き、安萬侶は確実にその課題を果たそうとした（「謹み

て詔旨の随に、子細に採りひろひぬ」にもかかわらず、彼は、日本以外の宗教についても割合に広い知識をもっていたとの推定を考え合わせれば、疑いなく自国の宗教の長所に好ましい光を当てる野心も満々であつたに相違ありません。しかしながら、彼は、朝廷のむしろ慎ましい役人として、創意に富んでいても、自分の考えを率直に公にすることができなかったことでしょう。もし彼が幾代にも伝わってきた神話の中身を一箇所でも変えたならば、神主のような神話に関する有力者はすぐそれを指摘して、その結末はどうなるか分からなかったでしょうし、もし彼がある程度でも皇室とか貴族階級とかの特権に違反したならば、その帰結はなおさら予想できないものになったでしょう。

勿論、安萬侶のような篤志家は、具合の悪い状況を前にしても、自己の運命を開拓していくものです。和銅四年（七一）九月十八日に安萬侶に仰せ付けられた指令によつて、ただ「旧辭の誤り違っているのを惜しまれ、帝紀の誤り乱れているのを正そうと」してゐるべきでした。それに基づいて、安萬侶は記録されたり口承されたりしてきた神話・伝説などを調べたり改めたりする許可を得ました。そして、先見の明があつて、万一に備えて気儘に振舞わずに、ところどころの「言葉の意味の分かりにくい時、注を加えて明らかにし、事柄の意趣のわかりやすいのには別に注はつけなかった」（「辞理の見えがたきは、注をもちて明らかにし、意況の解り易きは更に注せ

ず」と序文ではっきりと表明しました。思うに、「わかりにくい」か「わかりやすい」かによつて駆け引きをすることなく、時々要点をつかんで説明をつけたのですが、自覚してか、不注意にか、主要な箇所を見落とした場合も少なくありません。

けれども朝廷の命令を果たす困難やコメントの有無に加えて、安萬侶の課題すなわち改まった帝紀という編年史を書くことは、公務に就いている人の知能的仕事でしかありませんでした。この宮廷役人の集団は、決して安萬侶の気掛かりに注意しないで、具体的な結果ばかり望みました。安萬侶が創作法に関する何らかの質問をして、彼らの方からの叶った応答を期待することは希望的観測にすぎなかつたでしょう。一方、安萬侶は大いに面食らつていて、漢文か和文か、和文なら音仮名か訓仮名か漢字仮名交じり文かなどという問題が結論の出ないまま目の前に浮かんていました。彼はおそらく決定を下す前に解決に苦しんだ色々な試みに従事したと思ひますが、しかも、誰かに訴えることで、その苦しみを客観化することができませんでした。

もし安萬侶が朝廷の前で『古事記』の肉筆で書いた原稿を献上する時に、自分の躊躇のことを言及したならば、間違ひなく少なくとも無礼者と名付けられたことでしょう。ですから、華やかな序文でも、この表記法に関する面白味のない散文的記述は、何の詳細な報告も含んでいませんが、解決困難な問題があるというメッセージが

そこに伝えられているので、筆者はそれを読み取るために、七、八世紀の言語史的場面を考慮した形態音素をたよりに考察し、先例にこだわらずに研究することにしました。

第二部 書記方法と八世紀初期の口頭言語

以上に解釈された序文の一片の中に一度も和語とか日本語とかいう用語は現われてきません。「音」と「訓」だけが区別され、訓が三度、音が二度見られます。周知の通り、音は、まず字音や漢字の読み方、さらに人の口から発せられたシラブル（音節）のことであって、それらの両方の使い方があの断片に出現しています。一方、訓は、漢字の意味に基づいて、それに当てた日本語による読み方です。こういうふうに読み方やそれを反映させている書き方の分野が、あのころの中心になっていた問題なのでしょう。

もちろん、無数の漢字の渡来の時期の以上のような問題意識の傾向は我々にも分かりやすいものであります。けれども、同時期の話し言葉の有様を理解することも不可欠なものだと考える必要があるだろうと思います。とは言うものの、あの時代の人民は、自らの口頭語の特徴を実践的に経験したり使用したりしていて、当時の書記法と結び合わせる困難が一般においては認識されませんでした。一方、後世の人間（現代の世代も含めて）は、大体において、八世紀初めの口頭語の様子を適切に知ることは、多かれ少なかれ制限が

あるのです。と言うのは、国語史におけるどの一定の世代も自分の国語をもっていて、ある時期の言語事実を静止した体系として、その独立性をもっています。したがって、相次いで変わる時期の用語は、その時代の語に音声で調和していても、意味の面から見て、後の段階の聴衆を迷わし誤らせるような語になって、それを使用する各世代も、前世代の語彙を受け入れるなら、その語彙を客観的に再考する必要があります。

その現象は、言語論では、共時態と通時態の問題だとされているものです。通時態は一つの共時態から次の他の共時態への移行です。したがって、共時態と通時態の相即関係に注目することが肝要です。共時態の示す条件を明らかにすることによって、通時態が正しく捉えられます。顕微鏡的に眺めれば、上代の古典作品の解説は、論議の余地なく、二つの時期の間で言語に生じた変遷を研究することに近い分野であって、通時言語学の一区分にすぎません。けれども、解説という作業は、正確に言えば、時代を遡って、ものごとの根本が成った時にもどる進路を切り開く手続きとして認める方が願わしく、その目的は、以前の言語状態へと辿り着くことだと考えられます。その昔の状態は、解説者の個人語との関係が非常に薄く、その個人語との類縁があっても、まさにまことのハンディキャップになってしまっているのではないかと思われれます。例えば、『古事記』の語法と現代日本語の形態音韻は千二百年間の時差があって、いわゆる

膠着語の特性すなわち語法的機能が実質的意味を示す独立の単語に文法的意味を示す独立しない形式が連接することによって果たされるという性質には、千年以上前はいわゆる抱合語の特徴も見られます。つまり、文を構成する要素が点々と緊密に結合して、一つの全体をなし、そのままに文と見なされます。その上に、諸要素が特定の様式で連接していくために、結合に現われる形式は単独で現われる形式とは異なり、全体として一見分析しがたい様相を示します。

だからこそ、以下に『古事記』の歌謡の解説を行なおうと思う筆者の実験を開始する時、多くの現代人にとって疑いもなく理解を超えたほどの奇妙な異形態素が表われがちなのですが、本当にそれらの奇異性は、歌謡が起った時期の歌謡の特定の様式であると見なす方が適切だろうと思われます。とにかく、筆者の調査の意図は、この旧言語状態の真相を把握することで、調査の結果は作業仮説として受け取ってもらいたく切望いたします。もし、八世紀の日本語の本文を現代の語法に近い手段で調べてみる研究者がいるとしても、その考え方は、筆者の視点からは、むしろ時代遅れとなったものではないかという疑問を呈する他はありません。彼が誤解しているというものを納得させることは、至難の業で多分甲斐がないことでしょう。

ここまで筆者は日本語の類型的变化について一般的に触れましたが、若干の細目にも少しは触れるべきでしょう。その中で、まず上

代日本語の母音変化や音声の高低の調子（声調）のことを考えています。そのような問題は、筆者が推定して補足をしているものではありません。両方ともに今世紀になって橋本進吉、有坂秀世、服部四郎、小松英雄、金田一春彦などといった偉大な言語学者が学界に問い、それらの業績は今日までも彼らの後継の研究者によって続けられています。

それらの見解はある程度アメリカにもヨーロッパにも受け継がれているにもかかわらず、むしろ日本ではしっかりと根をおろしていないようです。とくに『古事記』のような古典を調査する文学論者、歴史家、宗教学者、民俗学者などは、上記の問題の言語学の達成を紛れもなく無視して、それについて言及もしていません。例えば、一九九五年に出版された『古事記の言葉』という古事記学会の論文集（高科書店刊）には、目次を見ても母音変化とか高低の調子とかに関する論文は入っていません。おそらく『古事記』の内容や自身を研究する人々にとっては、母音または声調の問題は無関係なのでしょうが、そんな態度は大間違いで、失敗を招くような姿勢です。なぜかと言うと、母音変化も高低の調子も原文の表層の現象ではあっても、実際に同文の深層の事象の徴候になっていて、内容の解明にも影響のあるはずのものであるからです。百年も経って、「母音変化は術学的趣味にすぎない」あるいは「千年以上前の高低アクセントを客観的に調べあげることがあり得るのか」などとその理論を、

実行する代わりに強調だけしているのは困難逃避の態度ではないかと考えられるのです。

ところが、母音変化は『岩波古語辞典』の「用語について」から引用すれば、次の通りです。「これは単語の意味を考えたり、語源を推定したりする場合には是非心得ていなければならないことである（中略）この八母音の区別は、動詞の活用との間にも種々の注意すべき関係がある。例えば咲カ・咲キ・咲ク・咲ケ・咲ケのよいうな四段活用の動詞の已然形と命令形とは、従来同一の音だと思われて来た。ところが奈良時代の万葉仮名を調べてみると、已然形の咲ケは *sake* で、命令形の咲ケは *sake* である。つまり、奈良時代には、四段活用の已然形と命令形とは別の音であったことが判明した。また、四段活用の連用形と、上二段活用の連用形とは同音であると思われる。しかし、四段活用の連用形は、例えば、咲キ、交ヒ、組ミについて見ると、*saki*, *kari*, *kumi* でイ列の甲類が必ず現われる。それに対して上二段活用の連用形は、例えば、尽キ、窓ヒ、廻(た)ミについて見ると、*tuki*, *kofi*, *tami* でイ列の乙類がかならず現われる。つまり、四段活用動詞の連用形にはイ列甲類 *i* が規則的に現われるに対し、上二段活用動詞の連用形にはイ列乙類 *i* が規則的に現われる。このように文法との関係も深いのである。こうした重要性に鑑みて、この辞典では、甲類乙類に関係ある音節を含む単語をローマ字表記して、その甲乙類の区別を示すこととした」

云々。要するに、古典研究の場合、それは必ず有効な知識であると言うことができます。

ましてや高低の調子の解明の学問的な価値は称賛すべきでしょう。そのような業績は、「語調史研究のみならず、声点の研究、清濁の研究、語源の研究、文法の研究など種々の立場から利用できる」と望月郁子氏がその『類聚名義抄・四種声点付和訓集成』の「まえがき」で指摘しています。奈良時代の言語の語調の幾つかの類例は、『古事記』の原文にも表わされていますが、私の知る限り、数回の解明の試みはありましたけれども、十分に妥当性のある力作は見えて来ませんでした。本居宣長翁も、その有名な『古事記伝』で「古言の声の上り下りの事」についてなかなか詳しく扱っています。が、それもあまり興味を起さなかったようです。なお『時代別・国語大辞典・上代編』は、非常に注意深くアクセントの問題に触れています。部分的に引用すると、「万葉仮名の用い方に、写される語のアクセントが幾分考慮されているという見方をする説もあるが、いずれにしても上代のアクセント体系を見出すためには、極端に材料が不足している。平安時代以後のアクセント研究等を基盤に今後の研究にまっとうところが大きい」とは言っても、とにかく「アクセント体系」のことをさて置いて研究の基盤を遡ることは、差し支えがありはしないでしょうか。更に、上述の『岩波古語辞典』も奈良時代のアクセントの価値の言及があり、「語根を同じくする語のは

じめのアクセントの高さ」に注意して、「これは語源を考える上で利用できる。(中略) どのような考慮にもとづく語源説を、この辞典で取り入れたところがある」と言明しています。そして、また『日本国語大辞典』の例外的なアプローチがあります。それを一言で特徴づけると、「文献の記載をもとにして推定された京都アクセントを注記す」とのことです。疑問点が残っても、アクセント史の記述のために用いた資料の主なもの、別の所に掲げてあるそうなので、その資料以外のデータは、この大辞典に出ていません。

さて、以上の簡単な展望に基づいて、上代のアクセントを調べる課題もあり、種々のアプローチも充分あるので、意味ある研究の成功を疑うのは根拠のないことと結論する外はないと信じます。

第三部 歌謡の本文とその分節

歌謡は、いわば韻律形式のある文芸作品で、散文の作品は韻律のないものではないけれども、韻律の役割は第二義的で、リズムを変えても構わないものだと言ってもよいでしょう。この研究の中で扱っている一群の歌謡は、日本文芸の韻律作品の最古のものだから、特別の価値ある文化所産であります。それ故に、度々内容的に自立性をもっている作品として処理されていますが、正確を期する立場から見れば、これらの作品は、一一三首ほどが『古事記』という大きな散文作品の中に点々と配置され、その散文の内容と密接な、相

互に関連のある関係になっています。時々、ある歌謡一首は、他の散文作品(例えば『日本書紀』)にも現われていますが、厳密に言えば、両方の内容関係は、ある程度違うと定めておくほうが、本稿の課題からよいでしょう。

ともかくも、ここではまずはじめの手掛かりとして『古事記』の上巻の中から取った六つばかりの歌謡を解説することにしますが、実は解説する六首とも『古事記』全体の断片として、残りの部分との繋がりが保存されているように考えますので、それらの前後関係も少しは考慮するつもりです。

歌謡のリズムは、筆で書いた原文とか日本で印刷したテキストとを見ても、原則として漢字で記されていて、どの漢字の字母も一拍(一音節)に当たっています。韻律作品ですから、歌謡はまずリズムを区切ったままに味わうものであるに他なりません。奈良時代では詠み歌う人は、そのリズムを直覚的に直接に理解することもできました。だが、後世は伝承だけを受けて、幾分かの区切りを真似ることに尽力し、要旨を把握する努力も重ねられてきました。

このごろは句の区切りは引き続いて残存して、歌の語句は確かな境界を見せるものになっています。すなわち、歌は区切りが定まったものだから、どんな句(一行)でもその始めと終わりに位置を占める字は、表意単位の中ではなく、どの句でもその初頭とか末尾とかの表示をなしています。ところどころは、疑問が起るようなの

ですが（例えば、神名が二句に跨っている類）、実はそれは表意単位の定義が正しく下されたものではないから生じていると思われるです。

今、右に「一行」という用語を使いましたが、本当を言えば、ただしく一行ではありません。原文のままにすると、歌の本文は音数律の形では書いてはありませんでした。文字は間断なく続いて、歌の終わりの文字まで並べてありました。韻律を識別できる読み手は、一つ一つの文字に相当する音節を発音して、釣り合いよく声を止めました。その釣り合いは今日は普通七五調と言って、五音句・七音句を一まとまりにして繰り返す句調形式です。以上の音数律はいつも規則正しく表わされていたとは言えませんが、十分に資格のある人は、前後の条件を一見しただけですぐ音律のないところを回復させる能力がありました。筆者は率直に言えば、韻律のことを専門家に委ねて、普通の句調を認めました。

以後は、文字に相当している音節の発音の問題に移りますが、その問題は現在の受け手の行為に関わっていて、上代の人は歌をおそらく口頭の形で聞いて直接に理解しました。現代日本人は、現代日本語の漢字という文字の連続を目のあたりに見ても、ただちに個々の漢字の使い方の知識を持って、一見して読み方も理解できます。ある時はそれは誤読になり得る場合もありますが、大抵結果は肯定的に終わります。古典文学の場合は様子が大分違っていて、

読む現代人は古典文の語法を無制限に知らないもので、広い分野のデータを探する必要がありますが、私見では、この場合、漢字に精通するという中で、の不可欠な識別術は、まさしく漢文と音仮名と訓仮名の区別であります。

前述の識別術の範囲も人々の知見によって違いますが、①以上の漢文、音仮名そして訓仮名という三つの観念の一般的限定、②どの観念にも対応する現象の表層の方位の理解とその限度、③どの観念にも対応する現象の深層の方位の理解とその限度について、以下に論じることになります。まず、①と②を一緒にして概ね『日本国語大辞典』で対応する項目に従ってまとめたいと思いますが、後に③を私見によって解決するつもりです。

その①と②の点・三観念の限定とそれらの現象の範囲。

A 漢文は変体漢文とも言って、漢字だけで表記された古い中国語の文章や文学に倣った日本の語句や文章や文学作品を言います。漢文の実例は、大方『古事記』の序文に使われていますが、本文にもバラバラに出現します。面白い例の一つは「黄泉」で、この二字は中国人の他界の名称で、その形象も日本のヨミと大分違うのですが、安萬侶は、この変わり種の語を改める工夫がありませんでした。さらに、漢文の半端な用法（語順と送り仮名のこと）が構文の組み立てのいたるところに見られます。一例をあげれば足りるでしょう。以下の例の初めの「詔」は末尾で読まれ、「自」は「右」や「左」

の漢字のあとで読まれて、「から」の意味で「より」と発音されています。

……乃詔汝者自右廻逢 我者自左廻逢……

……すなはちなはみぎよりめぐりあへ、あはひだりよりめぐりあはむとのらしき

B 音仮名は歌謡の表記法であるので、格別に注意すべきものではありません。これは、万葉仮名で書くすなわち古代日本語を漢字だけで書き表わすとき、その字の意味とは無関係に、その字の音を日本語の音節にあてはめて用いた漢字を使う方法です。一番簡単な用い方は、字母一連全体を音読文字で記すことで「夜久毛多都伊豆毛夜弊賀岐」がその典型であります。だが『万葉集』では次のような例が見えます「八万（ヤマ＝山）」・「四間（シマ＝島）」・「夏香思（なつかし＝懐かし）」・「名草武類（なぐさむる＝慰むる）」など。上の例にある「万」・「四」・「思」・「武」・「類」など、漢字一字を日本語の一音節にあてる場合が多いのですが、「絶塔浪爾（たゆたふ浪に）」・「散釣相（さにつらふ）」の「塔」・「散」のように一字を二音節にあてた例も少数あり、これは地名については、「相模（さが・む）」・「播磨（はり・ま）」の「相」・「播」など多数あります。

C 訓仮名は、この筆者の形式的な立場から見て、『古事記』の場合、漢文とか音仮名とかでない漢字の表記例の残りの部分なのであります。もしかして「栗国（あはのくに）」とか「一處（ひとと

ころ）」とかいう言葉について、それは訓仮名ではないという人がいれば、形式的にもそんな例外の語は問題にしくなくてもよいでしょう。なぜなら訓仮名としても「あはのくに・ひとところ」という解釈を保持しているからです。況んや、考えてみれば、史的にどの訓読みも気まぐれに選んだ説き方であり、定義通りの「訓」ということではありませんか？ これについては論じませんが、ともかくも万葉仮名で書かれている場合、すなわち、上代日本語が漢字だけで書き表わされているとき、その字の訓を日本語の音節にあてはめても、後の人は、同字本来の意味を利用せず、前後に出ている連字を考慮して、全部を音・訓仮名の解説作業の結果によって読むべきです。この場合も、実例の形で、字母一連全体を訓読文字で記して見せることがあります、それに固執することは誇張でしょう。特色のある類例は、もっと承諾しやすいものなのです。例えば、「なつかし（懐）」を「名津蚊為」や「夏檜」と表記した場合の「名」・「津」・「蚊」・「為」・「夏」・「檜」（借訓仮名、格助詞「と」を「跡」、「おおちの花」の「おおち（あふち）」を「相市」と表記した場合の「跡」・「市」（略訓仮名 など。以上のような表記法の表層についての方位の理解を見定める能力を持っている人は少なくないでしょうが、深層まで達する個人は、そんなに多くありません。それは多分知能の問題ではなく、むしろ、表層の限界を突き抜けることは、なかなか考案しがたいことに相違ありません。以下で、③点を同じく

A・B・Cに分けて、表層に明示された観念の深層に関連して敢えて触れたいと思います。

③の点・三観念に対応する現象の深層の方位の理解や限度

まず言わねばならぬことは、筆者の用語「深層」はチョムスキー氏の生成文法とは関連がなく、発話者の意識にある現象として想像された抽象観念ではありません。この論文の第三部の表題「歌謡の本文とその分節」と不可分に結びついています。本文に基づいて、同本文の具体的な構造を奥底まで見届けることが目的で、それを達成する方法や手段を隠さずに、何でも客観的に報告する過程を辿ろうと努力します。読者の方々からも御協力・御批判や御奨励をお願いできれば幸いです。

A 変体漢文。海外の文化のことを述べるために他国語を使う可能性があるかどうかという問題に一義的な答えを出すのは疑う余地は随分あります。実際に母国語を用いる場合もよく記述する保証は何もありません。さて、それは言語の問題とは言えません。まだしも言語を作用することであると言うことができます。思うに、安萬侶の漢語の操り方は巧みだったとは言え、多分彼は漢語の原型に模倣し過ぎた癖がありました。このごろは、外国人向けの日本語の教師は、学生が上手に先生の口真似をしていることを得意に思っていますが、それはちょっと歪んでいる評価ではないかと主張できるでしょう。真似ばかりして、学生たちは思考力を失いがちであるから

です。それは教育制度全体の傾向ではないかとも考えられます。安萬侶は羨の良い生徒だったに違いないが、独創的、固有の思惟を漢語で口にするとか、表記するのは、彼にとって不可能なものでした。筆者には本稿の難題を日本語で抜け目なく発表することも、この安萬侶の表記の苦勞にある程度似ているのではないかと判断されるのです。

本稿の第一部に安萬侶の意見を伝え、「漢字によって記述すると、漢字本来の意味とわが国のことばの意味とが一致せず、十分に意を伝えることができないことがある。」と指摘しました。これは半面だけの真理であつたと考えればよいでしょう。彼は主観的にその通りに考えましたが、「意を伝えること」は客観的に漢字は無関係のものです。日本語の表現能力は、彼は完全に修得していましたが、彼の記述力が漢語の場合は適切でなく、不足だった、と言い換えるべきでしょう。そうは言っても、安萬侶の能力を問題にする推察が補助的な手掛かりになって、筆者は『古事記』の序文の漢文の知識的な価値について推定する機会を得たのです。この知識は、序文以外のテキストの残部と比べれば、日本の上代文化を理解するためには取るに足らないでしょう。にもかかわらず、積極的にそれを見極めることは、学者の任務であると思います。

B 音仮名。筆者がまず第一に出会った音仮名の連字は、『古事記』の神話における神名と地名でありました(例えば、讃岐国・須

比智迹去神・知訶島・字摩志阿斯訶備比古遲神・伊耶那岐神など。少なくとも十五年前のことですが、この時期はまだ達成が信じ得なかった程のこの神話における名称の研究という大仕事は、自分自身の見るところでは、めでたく終了を迎えそうです。筆者は、この遂行で大いに勇気づけられ、今度は『古事記』の歌謡の探究に着手しました。

音仮名という万葉仮名のバリエーションの資料が手元にあったので、その資料の成分を調べることから始めました。百種以上の歌謡の一首は部分的にまた他の一首は全部漢字交じり文で書いてありますが、本稿では純音仮名のものに限って述べます。歌の長さはそれぞれ大きく違っていますが、それは語学的には問題ではありません。韻律の関係から見て、すべて五・七調の音数律に近いと教わっていたので、直接的に各句の構造に注意を向けました。句の中に使った字類の節約がすぐ目立ってきます。『日本書紀』の歌謡の音仮名と比べて、その四六六字のリスト(高山倫明編、参考文献参照)は、『古事記』の同様なリストは二三〇字を含んでいます。記・紀に見られる歌の数は同じくらいであると思われませんが、『古事記』の編集者太安萬侶は、音仮名をほとんどアルファベットのように、一字一音節の原則に近く考案しました。『日本書紀』の編集者達は方々から資料を選んで、直さずに転写したので、結果が割合にルーズに見えます。

『古事記』の音仮名字の索引を作った筆者には、音読の問題がありました。『古事記』の音仮名は大抵いわゆる呉音の因襲に属していて、七世紀ごろ日本列島はいわゆる漢音の慣習に従って受容していたのですが、安萬侶はあるいはその感化を受けなかったのでしょうか、少し保守的な立場を取りました。

呉音の分節音素と漢音の分節音素とは同じではなく(例えば、「何」は呉音ガ・漢音カ、「其」は呉音ゴ、ギ・漢音キ、「会」は呉音エ、漢音クワイ、「京」は呉音キャウ・漢音ケイなど)、ときどき前後関係を調べて、適当な選択をする必要が生じます。更に注意すべきは、音仮名の表記では、原則的に母音の甲乙類の区別が奈良時代には音声の分類に従って別々の単位で表記されていた事実です。けれども一番意外なことは、音仮名はいわゆる超文節音素すなわち高低のイントネーション(声調)を考慮する表記法であったということです。歌謡の原文は、いずれにしても長い間のテキストの発展の後の結果の形で表記するという課題を遂行するためには、六つの声調の種類を含有させている八〇箇足らずの文字が必要でした。安萬侶は二三〇字を応用して、一字一音節のシステムに似ているものを生みました。それは真に上代の素早い機転に利いた見事な知的業績でした。以上のシステムは無学な写字生でも使うことができます。それに基づいて作成された歌謡の本文は、思うに九五%ほど正確な、研究者の信用できる原典だとして認むべきものになりました。

にもかかわらず、そのシステムを起こさせた規則などは、まだまだ光が当てられていない点が多いのです。そして、その弱点を解明するのはこの論文の課題ではないですが、そのような音仮名本文を解読する機会が来ると、結局は、説明しにくいところに言及しなければなりません。解読前の音素連続は、例えば「尔波都登理」を例に取ると、音仮名のリストによってその文字連続を読むことは娯楽番組を見る如き楽しみを感じるのでありますが、それが「NIFeATU・TÖRi²」という音素に当たるものであると確認してから、意味を汲み取るときになると、「庭」は「NIFeA」だから適合しないし、「鳥」は「TÖRi²」だから、また的外れに見えます。不出来な分節になりました。とは言っても、とにかく、どの思い出された言葉も、その旧声調というべき本来の声調を、上代アクセントを提示する辞典・索引などに基づいて確かめねばなりません。的中しない場合は、古語辞典から適切なびつたりとする語を探す段階になります。

けれども、あいにくなことに、分節 (SEGMENTATION) は、しばしば過去からの複合語に関連していて、その連語に不完全な点が起こったので、その欠点を補わなければなりません。NIFeATUはその類例です。NIFeA+TU¹という分節の試みは駄目になったので、次は音節の真中で分節を行ないます。つまり、NIFeA+TU¹とした両断で、両部はその不完全さを見せたので、両方ともそのままに残さず、辞書的な形態素として見せることにします。

NIFeA² 新「未經験の」とA²TU¹ 熱「熱望している」というペアになって、通時的観点から見ても、二つの母音「+」から、大抵「+」だけが残存するという規則に基づきます。以上の前部は多分後部のTÖRi²の修飾語の役を果たすのでしょうか。探してみれば、「擒」TÖRi²「虜・とりこ・恋の虜」という単語があって、よい結果になりました。ところが、ときには、次の成分も複雑な衝突・混交・変化などが起こりそうです。この論文には、そのような現象を例として提示することはできませんが、あとで、幾つかの歌謡の具体的な本文の分節を実施するので、それもいい考えになると期待しています。

C 訓仮名。この論文のもっとも中核的な概念は、おそらく第一部で安萬侶の意見に基づいて初めて明らかに把握した次のような考えであった、と言ってもよいでしょう。「一句の中に音と訓とを問わずに用いようとするが、各音節にかぶさっているはずの声調についても、注意を適当に向けるので、原文のことばの意味がこれで保存されると望む。」それは安萬侶の剛胆な宣言のようだったし、彼はその発表によって宮廷の許可を得ることを期したと思われませんが、そんな信頼は実際には築かれてはいませんでした。安萬侶の宣言は典型的な「荒野に叫ぶ者の声」でした。

にもかかわらず、客観的な見地から考えて、その宣言の語句は画期的な出来事だったに違いありません。漢文が圧倒的に優越する八

世紀の時期に、日本語の慣用者の遺産である神話・歌謡・伝説などの本来の音声や意味の両面を保存し残存できるということは、世界でも類似的な例は稀にしかありません。その上、漢文と和文を同等の水平に立てて、まさに、和文の優位を利害を超越して予見する言葉を残すのは、比較にならないほど立派でした。安萬侶の不朽の労作は、音仮名の範囲だけでなく、訓仮名を高い水準に到達させるという比類のない傑作であるに相違ありません。

筆者は一九九五年にポーランドで出版した書物「DZIEDZICTWO JAPONSKICH BOGÓW」(日本の神々の遺産)で、『古事記』の天之御中主神から伊耶那岐命の禊と三貴神誕生の段までを解釈しましたが、その本で応用した言語解説の方法は、ほとんどすべてが訓仮名の特徴に関係付けられています。本稿では訓仮名は第二義的な役割を果たすにすぎませんが、それを、条件が変わったからと言って無視することは容認しがたいことでしょう。音仮名が卓越する条件の中で訓仮名の緊要性について、これから詳述したい気がしています。

第三部の③点B項では、純音仮名で表記した歌謡のことを述べましたが、どの歌にも、以前から昔の解釈者に作成された漢字交じり文が付随していると言わねばなりません。付随と言えば、普通コメントの中に入れたりまたは別紙になった付録などに添えたりする場合もあります。この漢字交じり文とは、表意文字で推敲を重ねて用

意した作品であります。筆者は、その手続きに関して広報などはいたくありませんが、一つの事実を目立たせるようにと口を利いてあげたいのです。奇妙なことですが、私が歌謡を解説するために引用文献に見える多種多様な十種類くらいの『古事記』の新解釈の本に目を通したところ、どの校注本にもまったく同じ漢字交じり文が見付かったことが注目されました。どの執筆者も一言もそれらの漢字交じり文を変えていませんでした。そこには何か企みがあるのではないかとも思いましたが、どこからもこの事柄を明らかにするヒントは得られませんでした。各執筆者一同が同意するとは信じられないと思います。だが、おそらく、すでに遠い昔から『古事記』の解釈に一定の思潮があつたのかもしれない。このような流れの参加者は、その集団の秘訣を今日まで伝授して、この口碑を後世に伝えていいると考えられないでもないでしょう。この場合は、あのさまざまな校注本の伝承も、そうした秘儀伝授の最近の光景だろうとも推測したいほどです。私には、それは副次的な報せにすぎなくて、大したことはないのですが、もし読者にこの私の印象について何か意見や情報をいただければ、ありがたく伺いたいと思います。

この論文を用意する時に、実は表題を「解説」か「解釈」か、どちらにしようか考えました。結局、前者を採用しました。従来の『古事記』の注解者は大体「解釈」をするのが当たり前だと思っていたようです。解説と解釈の意味の差は、調べた資料の難解や不明

瞭の程度によるという説明が一番有力であり、そして「鍵を使って解説する」という用例もあるので、千二百年前の日本語の世界へ共時態として見る鍵の発見を目指す本稿の作業は「解説」の作業であると考えて、「解説」という用語を使うほうがふさわしいと思いました。

「鍵」と言いましたが、漢文の場合は漢語の法則がすべて教えられていたので、それらの語法の方式はことごとく漢文の書き手や読み手の「鍵」であった、と言うべきであります。続いて、音仮名の観点から言うと、現在のありさまを出発点にして、読み・書きの両面で、いわば音仮名表といった参考資料を使用する可能性があるので、そのような表は間違いなく「鍵」と名付けてよいものです。昔はそんな音を列挙した仮名の一覧表がなかったとしても、写字生達には相応な教訓を口頭に受け継いでもらった何らかの慣例があったのはもちろんのことです。

最後に、訓仮名に話題を移すと、訓仮名というものはどう考えても日本語のことで、それを慣用とする人々は残らずその社交上の言語用法を間断なく吹き込む機会があるので、日常的に練習することができました。このような生活の教練場の社会は引っぱりなしに変わって行きますが、そのなかに、ありとあらゆる言語先例はもちろん存続しますが、その先例に関連する評価なども含んでいるので、理論上、言語探究のどんな疑問の手掛かりも得る可能性があります。

しかし、実践上、それを見付けることは容易ではありませんが、それは量的だけの問題です。研究に完全無欠を含有させることは、どの段階を扱っても保証することができません。ところが、訓仮名のような記号を規則によって用いるためのデータを獲得するのは、上代でも現代でも困難なしにできるものであります。だから、どの共時的な言語段階の範囲にしても、当時手に入れられる鍵はあったとみなすべきでしょう。

それでも、その鍵を上手に利用する言語慣用者は多くありません。だから、『古事記』などの本文は、誤りのないものではありません。そして、表記法にも改善の余地が多いです。特に訓仮名の場合は、以上で音仮名が表記のシステムに近いと言ったけれども、それは訓仮名の手順には、適用しません。上代には外国語である中国語と自国語である日本語のことは混ぜ合わせることは異常なのでありました。安萬侶は、大方、漢文と音仮名を以て日本語を改善するために屈曲しても構わないと思ったが、和文は、彼にとって神聖で侵すべからざるものだったと共に天然的に展開される現象集合体で、多分そこに言霊信仰の感化が見られます。天然と言っても、『古事記』では、天つ神の^{みこと}大命、すなわち天神が人に委託された天命でしょう。人間は、その天命に従うなら、皆が幸福に生きています。そして、広い展望で和語と和文も言霊の威力を被っているのです、それらにも従うべきでした。

言霊という概念は、いうまでもなく、神話の面白い要素でありますが、詳細な局面では、あいまいな点が多いです。古典文学では、私見によれば、その信仰のお陰で、和文の思想の表れ方が随分豊富になりました。歌人とか散文作者は気分が盛り上がった時には、それが言霊のせいかと思えば、願わしかったとおりに幻想的な考えに乗って、いい作品を拵えるチャンスに恵まれました。この創作の成果は、特に訓仮名の文体で興味深い結果をもたらす可能性がありました。

漢文・音仮名・訓仮名の三分野に等しい解読の過程は、二つの水準の間で実行されています。分節化前の段階と分節化後の段階がその過程の出発点と到達点をなしています。これらの両段階の間の時空連続体の範囲内に解読過程が連続して進行しています。勿論のことで、解読する人がその過程の主体、実現者です。正確に言えば、解読過程は現在の解読者の行動に限っていません。事実上、学問的な活躍は、個人的な活動ではなく、集団的な機動力であると同時に、その集団制度を通時的な共通の目標・規範・仲間意識などに基づいて相互関係が持続する人の群集団体として持ち出す必要があります。従って、『古事記』という作品の解読の出発点は、決してその後世の注解者ではありません。この出発点は、無論『古事記』の本文の断片を初めて記録して、後世に伝えた記録者達であります。それらの仕事は、さほど知られていませんが、実際においてそれが解読過

程の始まりです。彼らの口頭現象へ向けたアプローチ・把握・見積り方・表記法などの手続きの理解は、このごろ過小評価されています。私見では、安萬侶のような人たちは、分節前の段階はまだ意味を把握する段階ではないことを極めてよく認識しました。だからこそ、彼らは、例外的にだけ表意文字の語法を応用しました。却って、表音文字の法則が主張されています。まさに安萬侶は割合自由に訓仮名（表音文字の一類）を操って、同音異義語を応用して、種々の言葉遊びと縁語を創案することが好きでした。

通時的には従来の『古事記』の注解者の解釈の長い間の一連の活躍や彼らの達成も、もっと理路整然と調べるべきでしょう。彼らの正解も誤解も大概知られていないものですが、適切な方法論を講ずれば、将来の『古事記』研究にとつての道標として役に立つはずのものになりそうです。今頃、実質的に唯一の『古事記』の研究者として食い物にされた本居宣長翁は成績の否定できない大家だったのですが、単独な過去の代表者として紹介されることは乱用ではないかと思われまます。

とにかく、『古事記』研究者の通時的な時空連続体統一の概念形成は、その主要な関連や継続などが立証されたあとで、道理が生じるようです。そのような概念に基づいた『古事記』研究に関する史的知識が発生したならば、客観的な研究成果のためには、次々に母音の甲乙類の差別や超分節音素を考慮して調べねばなりません。そ

れによって、正読と誤読の単位が分離されます。正読単位は保存され得る切っ掛けを得ますが、誤読単位は、戦死した英雄が榮譽を得ているような特殊な役割を演じる運命があるのです。その役割は『古事記』の解説過程の範囲内では、誤読と認定された読み方をこれから避けるように警告するという作用です。そのような警告がないうちに、どの『古事記』の注解者でも、例の読み方を不注意からも繰り返す危険に陥る可能性があるのです。それゆえに、前述の警告になるべき誤読の実例は、分離検査の後、印刷した索引の形で発表されるはずでしょう。それは、前の世代の、次の世代のために役立つ贈り物だと思います。

いうまでもなく、そんな誤読の索引なしでも研究することがあります。けれども、そのような準備手続きのない調査は多くの時間を無駄にします。解説する方法に関連する説明は、前の第三部③点B項の終わりに提出しましたので、ここには言及しませんが、運の悪い場合は準備不足の結果、研究者は多くの先例を自分の力で再解決しなければなりません。

第四部 歌謡の解説の実例

(イ) SK 82.1 の歌 豊玉毘売のメッセージ

これからはSK 82.1と表示した歌を一例として取り上げたいと思います。一般的な前後文意の理解、さらに短歌の構造の規律を守る

と、歌のリズムは次のように現われています。

阿加陀麻波／袁佐閑比迦礼杼／斯良多麻能／岐美何余曾比斯／多布斗久阿理祁理

この中で五つだけの音声（陀・袁・杼・良・何）が、高山氏の「日本書紀音仮名声調表」に出ていませんが、藤堂明保編『学研漢和大字典』に出ている中古音によって補って次のようにしました。

¹A¹K¹DA¹MA¹FA¹ WO²SA³FE³FI^{1,2,3}KA¹RE²DÖ² SI¹RA¹ TA¹MA¹NÖ^{1,2}

KI¹MI²GA¹YÖ¹SÖ¹FI^{1,2,3}SI¹ TA¹FU³TO²KU²A¹RI²KE¹RI²

手近にある『古事記』の解釈の研究本の八種を調べてみると、皆同様に、次のような漢字交じり文を、中身を説明するために利用しています。

赤玉は／緒さへ光れど／白玉の／君が装し／貴くありけり

表面的に見るだけならば、音節は全部音仮名に対応するのですが、声調は互いに一致しません。声調にふさわしくない語句には下線を付しています（以下同様）。

¹A²K²DA¹MA¹—FA^{1,2} WO²—SA²FE²—FI¹KA¹RE²DÖ²
SI¹RA¹TA¹MA¹—NÖ¹

KI²MI²—GA^{1,2}—YÖ¹SÖ¹FI²—SI^{1,2} TA²FU²TO²KU²—¹A¹
RI²KE^{1,2}RI²

声調の不確かな「さへ」を加えれば、不一致のところは、音節の数

を計算単位にして三〇%になります。もちろん、慎重論者は、保守的な態度を取って、声調不一致は、この場合は必要でないという意見を取れば、不可思議などではないでしょう。けれども、以上のいわば説明すべき漢字交じり文とは、全くもってけしからぬものではないかと判断することもできます。歌い手は、豊玉毘売と言って、その夫火遠理から立ち去ったので、遠い海神の国から妹を送りながら、その決意の理由を述べる歌を元の主人に伝えます。このような瞬間には、「赤玉は、それを通す緒まで美しく光りますが、それにもまして、白玉のようなあなたのお姿は、立派で美しいことです」のように、本気でなく、ふざけたことを言う外はないでしょう。なによりも火遠理は天下る現人神であられたからです。

ところが、原文の音仮名の声調をできるかぎり守って、適切な観念を当てると、歌の中身は、はるかによく全体の光景を示していると考えられます。それは、筆者の魔術のためではなく、安萬侶が相應しい音仮名声調を標示した成果であると承認する外ありません。

「アカダマ」という言葉は、第一番目の不調和であります。「赤」は色の名前としてよく知られた言葉なので、声調を正しく音仮名で書くことは、問題ではありませんでした。だから、「阿加」という字母を選んで、安萬侶は意識的に決意したとします。にもかかわらず、「AKA」というパターンの言葉がなく、アカツ（頌）、アカフ（贗）は、同じパターンの「AKA」または「AK-」を持っているが、語

尾の部分が意味の特定の妨害になったり、意味はまた似つかわしくなるのか、ということが問題になりました。アカに次ぐダマは、普通清音のタマであるらしく、アカとタマの間には、子音 t があれば融合されるでしょう。「AKA t -TA ma 」（頌ッ玉）にして「アカタマ」の形になったらしいが、あの時代はまだ促音を表記する方法がなかったからか、発音しなかったからか、 TT , SS , KK などは t , s , k になって、時が経つに連れて、アカタマが濁ってアカダマになってきました。けれども、本義のことなら、歌い手の豊玉毘売のことであるので、玉はその女性の名前を代理して、姫は夫から立ち去ったので、文字通り「切り離して別々にした」といって、自己批判のようであると理解すべきです。

アカダマと一対をなしている「白玉」は、多分「白色の玉」ではなく、比喩的に「生地のままであること、つくり飾らぬこと、あけすけ」などと意味すると望めます。それは火遠理との直喩ではなく、女性に響える言い回しであります。その女性は、メッセージを持ってくる豊玉毘売の妹玉依毘売です。まだ少女で、世のけがれに染まっていない純真さ、ういういしさなどのこもった若者として、名前から「玉」が人物の代喩のようになったので、「シラタマ」と名付けられています。

「ヲサヘヒカレド」は「アカダマ」を伴っています。玉の光の代わりに、玉を通す紐を先立たせるものは、うんざりするほどの散文

的な語で、非常に不器用な表現ではないかと思えます。幸いに声調は、その出現を根絶するものです。WO:SA³FE³の声調のパターンによる言葉を探すと、「WO:SA³長（かしら、人の長）」が一番近いと見えそうです。「サ」の去調を上調と同様に扱うことは、高山氏の意見によれば、基準と認めるのがよいでしょう。けれども、³FEは、同調の「経」にしたならば、「長経」は熟語になりません。にもかかわらず、ヲサは「ヲシ、食し」の派生語で、「たべる、着る、治める」の尊敬語であって、「着る」はまた「お召しになる」の意で、玉と結び付くのに差し支えはありません。さらに、「食し添ふ、WO:SI²SA²FU¹」という合成語を練りあげれば、それは容易に WO:S-SA²FU¹→WO:SA²FU¹ になり得るのです。明らかに SAFU は「SÖFU」添ふ、副ふ」の転だと考えられてもよいでしょう。「あかだまをお召しになって、肌を離れずびったり付いている」(比喩的に「夫婦として一緒にいる・連れ添う」)。結局、「食添ふ」は已然形を承け、「食添へ」になっているが、恒常条件を示す形式で、後に次ぐ「光れど」は、いわゆる逆接の確定条件だが、その終助詞は、文の終わりで、言い切りの調子をやわらかくして、前に述べたことと食い違ふことが起こって残念だといった感情を込めています。「あかだまをお召しになって、肌に離れずに、びったり付いていると、いつもきらきらと光っているのに……(残念ながら、万事が失敗しました)」という中身になります。

一番あやふやな誤読は「キミ」です。上辺は些細なつまらないことですが、「君(君主)」の声調の不一致で、他の KI:M²のパターンのあるような熟語は見えそうにもありません。唯一の指図は、キミが「シラタマノ……」と「……ガヨソヒシ」の間に位置されています。「白い真珠が(何々)の装飾である」というような前後の関係です。筆者の考えでは、玉依毘売が海の女神だから、真珠としてなおさら海の装飾のように紹介しています。海が「ミ」になる場合は知られていますが、接頭語の「キ」(KI)をどこから取ればいいのか、決定を延ばす方がよいでしょう。暫定的に YIKI(活力として、勢いのイキ)を選んで、前の「イ」が脱落されるので、キがミと一緒に KI:M²「活海、勢力・活力・精力ある海」にします(同じ由来のキが現在も使われているのです。生糸・きぶどう酒など)。最後の妨げとなる連字は、「タフトク」です。古代仮名遣いによつて、それは「貴く」に似ていますが、声調が違うのです。幸いに、「タフ」という二音節を、他の歌謡の中に見付けて、客観的に説明しました。ある程度それは、わからないことを一層わからないことで説明しようとしたことでした。すなわち、今まで定説を持たない「インタフヤ」という枕詞の新解釈を利用するリスクを冒しました。「斎風訴哉」という自説を当てにして「タフ」を、「ウタフ、訴ふ」を前略して、派生させました。声調でためらいますが、(二)・「」のパターンを受け入れてよいのです。合成語の二番目の部分は、お

そらく「ウトク、疎く」です。そうすると、タフは、やがて動名詞
タへ（訴へ）になって、 $TAF-U^2TO^2KU^2 \rightarrow TAFU^2TO^2KU^2$
という合成語になります。その意味は、自由に訳すと、「しきりに
窮状を訴えて、うんざりさせるのが嫌いだから、見聞きしたくない
さま」になります。そのような内容は、玉依毘売に関する紹介と推
薦を示す訳になります。

今後、筆者はすでに自説の全部の提議を目指して提示する可能性
をもっています。

「自説による漢字交じり文」

「自由な現代語翻訳」

- (1) 頒玉は
切り離して別々にした玉は、
お召しになって、肌に離れず、びっ
たり付いていると、いつもきらき
らと光っているのがありそうな
だったが、残念ながら、万事が失
敗に帰してしまいました。
- (2) 食添へ光れど
つくり飾らぬ美しい真珠は
精力があまつさえある海潮からの装
飾なので、
しきりに窮状を訴えて、うんざりさ
せるのが嫌いだから見聞きしたく
ないものでございます。
- (3) 白玉の
- (4) 生海が装し
- (5) 訴疎くありけり

(ロ) SK 82.3 火遠理命の返歌

続いて、火遠理の返歌を提唱したいと思います。原文の音仮名を
ローマ字に転写表記しました。ただし、高山氏の声調表には、
「意・賀・碁」だけが出ていません。

「原文の音仮名」

「ローマ字の転写表記」

- (1) 意岐都登理 $O^2 KI^2 TU^2 T\ddot{O}^2 RI^2$
 - (2) 加毛度久斯麻迹 $KA^1 MO^1 \cdot 3 DO^2 KU^2 SI^1 MA^1 NI^2$
 - (3) 和賀韋泥斯 $WA^1 \cdot 3 GA^3 WT^1 NE^1 \cdot 3 SI^1$
 - (4) 伊毛波和須礼士 $YI^1 MO^1 \cdot 3 FA^1 WA^1 \cdot 3 SU^1 RE^2 ZI^2$
 - (5) 余能許登碁登迹 $Y\ddot{O}^1 N\ddot{O}^1 \cdot 2 KO^2 T\ddot{O}^2 GO^1 T\ddot{O}^1 NI^2$
- 従来の注解者の漢字交じり文を示し、その発音転写の原文との不
一致の所にアンダーラインを引きます。不一致のところは、音節の
数を計算単位にして四二％に近いです。

- (1) 沖つ鳥 $O^2 KI^1 - TU^2 - T\ddot{O}^2 RI^2$
- (2) 鴨著く島に $KA^1 MO^1 - DO^2 KU^2 - SI^1 MA^1 - NI^2$
- (3) 我が率寝し $WA^1 - GA^2 - WI^2 - NE^2 - SI^2$
- (4) 妹は忘れじ $YI^1 MO^1 - FA^2 - WA^2 SU^2 - RE^1 - ZI^2$
- (5) 世の悉に $Y\ddot{O}^2 - N\ddot{O}^2 - K\ddot{O}^2 T\ddot{O}^2 GO^1 T\ddot{O}^1 - NI^2$

以上の注解文は従来は次のように訳されています。「沖にいる鳥、
鴨の寄り着く島で、私が共寝をしたおまえのことは忘れまい。私の

生きているかぎり」。これは、全く精彩のない、感情に動かされぬ作り物の解釈であります。声調の混乱が多くあるので、形態を改める時に、内容も変わって行くことが望めます。

以上の各行の自説の解釈は以下の通りです。

(1) $O^2 K^1 T^1 U^1 T^2 O^2 R^2$ は $T^2 O^2 R^2$ が誤解なので、前のオキツも後のカモも、多分その意味を保存しません。 $T^2 O^2 R^2$ は「擒り」と同定するから、「捕らえたもの、取り子、もらい子、養子、婿に迎えた男、虜」を意味します。したがって、 $O^2 K^1 T^1 U^1$ は、奥つ $O^2 K^1 T^1 U^1$ に替えれば「心の中にある、心の奥底にある、心に深く秘めている、心情に動かされる」を意味します。自己批判を示すらしいのです。そこで、全句の訳は、「心情に動かされぬ擒り子であつたが……」です。

(2) $K A^1 M O^1 S^3 D O^3 K U^2 S^1 M A^1 N^1$ は $D O^3 K U^2$ だけが誤解だが、前後の言葉も意味上に脱線されていると思います。「鴨著く」は意味をなさないので、その代わりに同じ声調のある $K A^1 M - O^2 D - O^2 K U^2$ (嚙怖招く) と推量すると、 $K A^1 M \rightarrow K A^1 M^1$ 「かみつゝかみ合う、いがみ合う」 $O^2 D \rightarrow O^2 D^1$ 「おどおどする、こわがる」 $O^2 K U^2 \rightarrow W O^2 K U^2$ 「まねき寄せる、起こす」となつて、三成分で「唾み合いや恐怖を起こして」を意味します。そうすれば、「島に」は異義語になるので、同声調のある $S^1 M A^1 N^1$ を「締ま」という動名詞にして「懲め」と同義語であると認めます。「シマニ」

とは「懲らしめのためには、または、こらされたため苦い経験をさせることによって」になります。さらにコラシメル原因は、カモドクによって表わされます。そこで、「唾み合いや恐怖を起こして懲らされてしまったため」という意味になります。

(3) $W A^1 G A^3 W^1 N E^2 S^1$ は、前行は、喧嘩のことで、後で WINE 「共寝」のことが疑わしくなります。「牛」がはっきりと誤解で、「ネ」も多分間に合いません。「キネ・キネシ」は古語辞典に出ているが、軽率に注解本の誤解を相続するので、受諾できないものです。最初の文字「キ」を持つ語も少ないし、カモドクと、どうかして釣り合う言い回しを見付けることは、順調でした。すなわち「堰」 W^1 または「堰き(セキ)」とも言つて、「せきとめるもの、隔てるもの」を意味する名で、したがって $N E^2 S^1$ は「根し」(古語辞典には出ていない動詞だが「為」は「体言について動詞をつくる」という語法が見えるのです)、「根ざせる」に応答する動詞を選択しました。全行は、「我が堰根し」、換言すれば、「私自身が我々の間に堰き止めを根差せた」になっています。

(4) $Y^1 M O^1 S^3 F A^1 W A^1 S^3 U^1 R E^2 Z^1$ は「忒れ」が声調の不一致のため、誤解なので、また、何か合成語ではないかと推量します。「妹」はすでに記述した「切り離して別々にした」伴侶のことだから、 $W A^1 S^3 U^1$ は「座す」すなわち「有り、居り、行き、来、の敬語」ではないかと思ひめぐらします。「レ」は、根拠がまずないが、「ウ

「WU¹RE²」は略した「愁え(ウレヘ)」として、内的脱落による派生であり得ます(我大君↓ワゴホキミ、マクホシ↓マホシの類)。この行の意味は、「あなたがお離れ去りになられたことを、それ以来訴えもしない」ということです。

(5) YÖ¹NO¹2KÖ²TÖ¹GO¹TÖ¹NI² (NOとNIは直さないで残すことが可能だから、残りの部分を直すべきだということは既述した)。

「節の同事に」という訓仮名を応用すれば、数少ない近似の声調のパターンになります。「節 YÖ¹」は「世 YÖ²」と超文節的に違うため、「節」の入ったまま、声調が原文と一致すると同時に、多分比喩的に「一生涯・寿命・世の中」を意味します。「同事(ことごと)」は「一つこと。同一のこと。相等しいこと。類似していること」です。したがって、この行は、「世の中は、相変わらずその通りであるようです」という意味です。

【自説による漢字交じり文】 【自由な現代語翻訳】

- (1) 奥つ擒り 心情に動かされる擒り子であったが、
- (2) 嚙怖招く締まに 唾み合いや恐怖を起こして、懲らされてしまったため、
- (3) 我が堰根し 私自身が我々を隔てた堰き止めを根差せたものである。
- (4) 妹は座愁れじ あなたがお離れ去りになられたこと

を、それ以来訴えもしない。

- (5) 節の同事に 世の中はいつもその通りであるようです。

(ハ) SK 38.6 須佐之男命の結婚式の祝い歌

これまでの二首の歌謡は、まず全体を示しながら解釈を進めましたが、以後の作業は、一首の中の個々の句の細かな新解釈を、従来の解釈と比較しながら進めます。

夜久毛多都／伊豆毛夜幣賀岐／都麻基微爾／夜幣賀岐都久流／曾能夜幣賀岐袁

- (a) 夜久毛多都 YA³KU²MO¹3TA¹TU¹

【従来の解釈者による漢字仮名交じり文】(以下「従来の解釈」と表示) 八雲立¹ YA²KU¹MO¹TA¹TU² (下線は誤解されていた声調、以下同)

【新分節】 YA³・KU²MO¹3・TA¹TU¹

YA² 弥 ← YI²YA² [弥栄 YA・SAKA, 弥堅¹ YA・GATASI, を参照]《無限に、極度に、ますます、最も、制御できぬ》KU²MO² 酌² ← KU²MI¹ [立¹と立²を参照]《思いやる、推し量る、寵愛すること》[動名詞を示す派生形態]TA¹TU² 発

つ《おこる、わく、ゆるぎなくおる》[TUの声調は別の意味に理解した語句のような誤解ではないかと思う。「都」を写字生が「観TU²」の代わりに書き誤ったのかもしれない]

【一句全訳】【制御できぬ寵愛が心の中に湧いてくる】

(b) 伊豆毛夜幣賀岐 YI¹DU³MO^{1,3}YA³FE³GA³KI¹

【従来の解釈】出雲八重垣 YI¹DU^{1,2}MO¹YA²FE²GA²KI¹ 声調は悪くないが、前の句との連想がなら]

【新分節】YI¹D・DU²MO²・YA²・FE³・GA²KI¹

YI¹D→YI¹DE²出で《外から見えるようになる。姿を見せる》-DU²MO²積も→TU²MO^{1,2}【前句のKUMMOを参照】《ふえること。膨大なるところ》YI¹D-DU²MO²出積も《姿を見せてふえてくるところ》YA²弥【前句のYA²弥を参照】《立派なる。すばらしい》FE³閑《陰茎。くさ。内茎。玉茎。男根》-GA²KI¹【原文の「賀」はKA²とも発音される。「八重垣」という合成語になるきっかけで濁音になったものを改めた】KA²KI¹欠き《怠る。なおざりになる。怠ける。むだにする》

【一句全訳】【姿を見せて、膨らんでいる立派な玉茎は怠情になっ

つて]

(c) 都麻碁微爾 TU¹MA¹GÖ¹Mi¹NI²

【従来の解釈】妻籠みた TU²MA^{1,2}GÖ¹Mi²NI²

【新分節】TU¹M・MA¹K・KÖ¹M・Mi¹・NI²

TU¹M→TU¹ME²詰め《閉じる。ふち。締める》MA¹K→MA¹KI²枕き《イクラとする。いっしょに寝る。女を犯す。通ずる。密通する》-GÖ¹Mi²→KÖ¹Mi²籠《外界と接触を断っている。外から見えなくなる》「妻籠み」という合成語になるきっかけで濁音になったのを MAK-KÖMとKKの接触になったので、清音に改めるべきだろう】Mi¹廻《入りまがった所。迂回。まわり。めぐり。あたり。辺鄙。隠居所》-NI²に《存在し、動作し、作用する場所を、「そこ」と明確に指定する意》

【一句全訳】【戸をふさぎつつ妻と共寝したり、外から見えなくなつたりした隠居所のなかに】

(d) 夜幣賀岐都久流 YA³FE³GA³KI¹TU¹KU²RU¹

【従来の解釈】八重垣作る YA²FE²GA²KI¹TU¹KU¹RU²

【新分節】YA²・FE³・GA²KI¹・TU²KU²RU¹

YA²・FE³KA²KI¹ 弥閑欠き【説明は前の(b)句による】TU²KU²RU¹ 尽くる【前の(a)句のTA¹TU²と同様に「都」は多分「観」の代わりに写字生によって使われている。紀の同じ歌では「観TU²」という音仮名が使っている】TU²KU²RU¹はTU²KU¹の連体形で、この語形を終止形と同様な機能で以前から用いる傾向があったようだ】《消耗して果てる。消え失せる。減っていく》

【一句全訳】【立派な玉茎の怠情性ぞ、すぐさま消え失せたものになる】

(e) 曾能夜幣賀岐袁 $S\ddot{O}^1 N\ddot{O}^{1,2} Y A^3 F E^3 G A^3 K I^1 W O^1$

〔従来の解釈〕其の八重垣を $\underline{S\ddot{O}^2} \cdot N\ddot{O}^{1,2} \cdot Y A^2 \cdot F E^2 \cdot G A^2 K I^1 \cdot W O^{1,2}$

〔新分節〕 $S\ddot{O}^1 \cdot N\ddot{O}^1 \cdot Y A^2 \cdot F E^3 \cdot G A^2 K I^1 \cdot W O^{1,2}$

$S\ddot{O}^1$ 夫 [背 $SE = S\ddot{O}$, 海布 $ME = M\ddot{O}$ 等のそのような転換による] 《せ。おっと。愛人。親しい男性。訪れて来ることを許した男。結婚の相手に決まった男》/ $N\ddot{O}^1$ の [主語を示す用法] / $Y A^2 \cdot F E^3 \cdot K A^2 K I^1$ 弥問欠き [説明はすべて前の(b)句による] / $W O^{1,2}$ を [感動詞「を」は、物事を承認し確認する気持ちを相手に表明する語である]

〔一句全訳〕【夫のみことな玉茎の怠惰性なあ】

〔自説による漢字交じり文〕 [自由な現代語翻訳]

- (1) 弥酌も発つ
制御できぬ寵愛が私の心の中に湧いてくる
- (2) 出積も弥問欠き
姿を見せて膨らんでいる立派な私の玉茎は、怠惰になったので戸をふさぎつつ妻と共寝をしたり、外から見えなくなったりした隠居所のなかに
- (3) 詰枕籠廻に
厳かな玉茎の怠惰性ぞ、すぐさま消え失せてゆく。
- (4) 弥問欠き尽くる
この夫のみことな玉茎の怠惰性なあ。
- (5) 夫の弥問欠きを

〔コメント〕世に知られたこの歌は、間違いなく上代から伝わった結婚披露の歌です。筆者の自説による解説は、他の解釈者とは十分異なっています。伝統から受け継いだ解釈は、勿論無視してはならず、放棄するわけにもいかないと考えられるけれども、研究者の課題は、客観的、公平な目で見たと探究の結果を、何も隠さずに公然と発表する義務です。従来の見解は、誤解に基づいても、独自の価値があり、独自の存在意義をもって文化の構造の中に残存して、作用しています。筆者の新見解は、まだ人々の推奨を得る必要があるので、定説になるまでにはなお時期は遠いのです。

(11) SK 47.2 大國主神の沼河比売への求婚

夜知富許能／迦微能美許登波／夜斯麻久爾／都麻々岐迦泥弓／登々富々斯／故志能久邇々／佐加志売袁／阿理登岐迦志弓／久波志売袁／阿理登伎許志弓／佐用婆比邇／阿理多々斯／用婆比邇／阿理迦用婆勢／多知賀遠母／伊麻陀登加受弓／淤須比遠母／伊麻陀登加泥／遠登売能／那須夜伊多斗遠／淤曾夫良比／和何多々勢礼婆／比許豆良比／和何多々勢礼婆／阿遠夜麻邇／奴延波那伎奴／佐怒都登理／岐藝斯波登与牟／尔波都登理／迦祁波那久／宇礼多久母／那久那留登理加／許能登理母／宇知夜米許世泥／伊斯多布夜／阿麻波勢豆加比／許登能／加多理其登

母／許遠婆

(A) 夜知富許能 YA³TI^{1,3}FO³KÖ²NÖ^{1,2}[従来の解釈] 八千矛の YA²TI^{1,2}FO¹KÖ¹NÖ^{1,2}[新分節] YA²・TI²・F・O²KÖ²・NÖ²

YA² 弥 [SK 38.6—(a)句の YA を参照] / TI² 霊《自然物のもつ
はげしい力・威力》[合成語に用いられる] / F→FO² 穂・秀 /
O² の脱落は、続く母音との接触を避けるように]《激情・色欲等に
おいて他から抜きんでている、最大限を示すこと》 / O²KÖ²↑
WO²KÖ² 招く「招く」という動詞の動名詞。W- の脱落は、前の
子音を承けるために生じる。WOKU→WOKÖ の変化は、WOTU
変若→WOTÖ 年若→MATU→MATÖ の類]《尊重するもの
などを招き寄せる者。誘引する者。相手と出会おうと招く者》/
NÖ² の《体言を修飾限定する用法》

「一句全訳」【制御できない色欲の最大限を招くこと】[後に「神
の命」を書き加えたまま、同連字の内容は、一定の神
霊の天命つまり天神から与えられた使命を示す。神託
含有名という用語を使うことにしている]

(B) 迦微能美許登波 KA¹MI¹NÖ^{1,2}MI²KÖ²TÖ¹FA^{1,2}

[従来の解釈] 神の命は KA¹MI¹NÖ¹MI²KÖ²TÖ²FA^{1,2} / 神の御
事は KA¹MI¹NÖ^{1,2}MI²KÖ²TÖ¹FA^{1,2}

[新分節] KA¹MI¹・NÖ¹・MI²・K・Ö²TÖ¹・FA^{1,2}KA¹MI¹・NÖ¹・MI²・KÖ²TÖ²・FA^{1,2} [SK 48.4—(2)句を参

照]

MI²KÖ²TÖ¹ というアクセントを含めた構成の表記は、この歌謡
に始めて出現したものであるが、写生字が誤ったものと見るべきと
ころである。その誤解のために、解説はまず悪い方向に進んで、
MI—K—ÖTÖ すなわち「御厳音」になったのだが、次の SK 48.4
の歌には「美許等」すなわち MI²KÖ²TÖ² という音仮名が見えてい
て、従来の解釈の「命」の読み方と同様になった。そうすると筆者
の新分節も改められた形態によることになる。

KA¹MI¹ 神《上代以前では、人間に対して威力をふるい、威力
をもって臨むものは、人間の怖れと畏みの対象であった》[多分、
語源上 YIKA—MI→KA—MI という成分から成っているのは
YIKE・MI 活け箕]《活け+箕》から派生する合成語である。箕
の作用はいろいろとまざっている種のなかから、不要なもの（ち
り・ごみ・がらなど）をとり分けて淘汰することによって適応する
ものだけが残るようにすることで、これと同様にカミの作用は一定
の活力のある生きものを同等でないものの中から淘汰する役目があ
る」という意味をもって、神霊の天命「前の(A)句を参照」によつて
表現された告知の中身に予告した状態を引き起こすことを使命とす
る] / NÖ¹ の《後置詞として、所属しているものの属性を持つこと

を示す用法／ M_1^2 御「古くは、神・天皇・宮廷のものを表わす接頭語。後世は、敬意が薄れて、単なる美称のように受けとられるに至った」《神聖なる》／ $K_0^2T_0^2$ 型・形「カタの母音交替形。多分コトの意味はカタよりもっと抽象的になるはずである。歌謡の内容ではミコトという觀念の真相が伝わっていないが、『古事記』の物語の流れの中にはミコトについては広く展開されている。それを簡単に言うと、宇宙を主宰する神の意思は、天地間の万般を決定し、逆らうことのできない絶對的な意思と認められるが、それは種々の方法（兆候・夢見・命名など）で、人間に伝えられているのである。だからミコトは「神聖なる天命」という意味の言葉に近いと思われる。また、ミコトが偉大な存在物のタイトルのような言い回しになった理由は、この種のもは「神聖なる天命、こめられた神意、神業など」によって恵まれているのであるからだと思われる。それ故、そのようなタイトルを天命被患者と呼び、天寵を受ける者という意味に解してもよい。 K_0T_0 に関する詳細なニュアンスは以下でも触れる」《いろいろな態度をつくるものになるもの・模型・模範。ある部類のものを制約する精神的な枠。天然的な様式や制度。規範となる様式。ある種のものに共通する特徴をよく表わしている性質・典型・しきたり・おきて・戒め・戒律・教訓・訓示・勧告など》／ $-FA_{1,2}$ は《提題の助詞。その承ける語を話題として提示し、下にそれについての解決・説明を求める役割をする》

「一句全訳」【活力という所有物を淘汰なさる靈に当たる神聖なる天命被患者は……】

「(A)+(B)の全訳」【制御できない色欲の最大限を引き起こす活力という所有物を淘汰なさった靈に当たる神聖なる天命被

患者自身は……】

(C) 夜斯麻久爾 $YA^3SI^1MA^1KU^2NI^2$

「従来の解釈」八島国 $YA^2SI^1MA^1KU^2NI^2$

「同意分節」 $YA^2 \cdot SI^1MA^1 \cdot KU^2NI^2$

YA^2 八《数の名。はち。日本民族の神聖数であった。比喩的に、無限の数量・程度を表わす語》「ヤ弥と同根」／ SI^1MA^1 島《水に囲まれた陸地》／ KU^2NI^2 国《人間が住んでいて、行政が行なわれる一定の地域》

「一句全訳」【多くの島がある国の中に……】

(D) 都麻々岐迦泥弓 $TU^1MA^1MA^1KI^1KA^1NE_{1,3}TE^1$

「従来の解釈」妻枕きかね $TU^2MA^1MA^1KI^1KA^1NE_{1,2}TE_{1,2}$

「新分節」 $TU^1MA^1 \cdot MA^1KI^1 \cdot KA^1NE_{1,3} \cdot TE_{1,2}$

TU^1MA^1 詰ま $\leftarrow TU^1MU^2$ 詰む [SK38.6-③句の $TUM-$ を参照] $[YIKA \rightarrow YIKE]$ 活む $SIMA$ 島 $\leftarrow SIME$ 締 MA^1KI^1 の同類変化 $[MA^1KI^1]$ 枕 $[SK38.6-③句の MAK-$ を参照] $[KI^1]$ の声調は多分続く $-KA^1$ と一致された結果 $[KA^1NE_{1,3}]$ 兼ね《他の動詞の連用形に付き、それをし遂げようとしても、不可能・困難の意を

表わす。／TE^{1,2}て《動作・作用・状態が完了していることを示すのが本来の役目であったが、確信・確認・堅い意志を表わすように用法が移って行った接続助詞である。動詞の連用形に付く》

【二句全訳】【四方の壁に籠りたがる乙女と共寝しかねても……】

(E) 登々富々斯「訓むときは「登々富々斯」 TÖ¹FO³TÖ¹FO³SI¹

【従来の解釈】遠々し TÖ²FO²TÖ²FO²SI²

【新分節】 TÖ¹FO²・TÖ¹FO²・SI¹

TÖ¹FO²←YI¹TO¹FO²SI¹ 勞し「YI-と-SIの脱落によって生じた形容詞の語根」《かわいそうだ。いやだ。かわい、いと、いじらしい、愛らしい》／TÖ¹FO²TÖ¹FO²SI¹ 勞々し「以上の語根の反復形に「し」のついた形容詞」《いとしい。かわいくてたまらない》「し」という語尾は、終止形の語法によるが、疊語の場合、語幹とするものになって、連体形の機能を果たし得た」

【二句全訳】【はなはだいとしし】

(F) 故志能久邇々 KO³SI³NO^{1,2}KU²NI²NI²

【従来の解釈】越国 KO³SI²NO²KU²NI²NI^{1,2}

【同意分節】KO²SI²・NO²・KU²NI²・NI^{1,2}

KO²SI² 越《北陸道の古称》「坂を越して行く地」の意か／-NO²の「体言を修飾限定する用法」／KU²NI² 国「前の(C)句を参照」／-NI^{1,2} 々【SK 38.6—(c)句のNIを参照】

【二句全訳】【越という国に】

(G) 佐加志売衰 SA³KA¹SI²ME³WO¹

【従来の解釈】賢し女を SA¹KA¹SI²ME³WO¹

【新分節】SA²K・KA²SI²・ME³・WO¹

SAK←SA²KI² 幸《栄え・繁栄・幸福・さいわい・仕合せ》

「賢し」の声調パターンは原文のパターンに相応しいので、安萬侶が応用したSAK-の語幹を選んだ。前にも TÖ¹FO³, KÖ²TÖ¹, FO³KÖ²等々も同様に扱った／KA²SI²←YI¹KA²SI² 活かし《生きるようにする。活気づける。生気を与える》「YI-の脱落はSK 38.6—(a)句のYAなどを参照」／ME³ 女《女性・女子・婦人》／-WO¹を《動作の対象の下について、それを確認するためにこの語が投入された。それから目的語の用法が生じた》「WO¹」という声調は平声軽または東点とあって、WOの最古形だったと思われるが、後に WO¹, WO²にもなる」

【二句全訳】【相手の心にあてて、幸福の感覚を活気づけることの

できる女性を……】

(H) 阿理登岐邇志 YI¹RI²TÖ¹KI¹KA¹SI²TE¹

【従来の解釈】在りと聞かつ YI¹RI²TÖ¹KI²KA²SI²TE^{1,2}

【新分節】YI¹RI²・TÖ¹・KI²KA²SI²・TE^{1,2}

YI¹RI² 在り《空間・時間的に存在する。他から存在が認識される》／TÖ¹と《ある文句の下について「言う・思う・聞く」とこ

ろの内容を提示し指示する役目を負う」／ $KI^2KA^2SI^1 \wedge KI^2KU^1$ 聞く [以下の(J)句に $KI^2K\ddot{O}^2SI^1$ 聞こし』という語があるが、その前音節は「岐」ではなく「伎 KI^2 」に作ってあるのだから、ここでも KI^2 に改める。次音節も多分「迦」の代わりに「伽 KA^2 」があるはずだとして、改める。写字生の誤りであると思う」《言葉を耳にする。聞いて知る》[$KIKU \rightarrow KIKASU, TARU \rightarrow TARASU$ 等は尊敬語としての用法]／ $-TE^{1,2}$ っ [前の(D)句の $-TE$ を参照]

「一句全訳」【……いるとお聞きになって……】

(I) 久波志売袁 $KU^2FA^1SI^3ME^3WO^1$

【従来の解釈】麗し女を $KU^1FA^1SI^2ME^3WO^1$

【新分節】 $KU^2F \cdot FA^1SI^{1,2} \cdot ME^3 \cdot WO^1$

$KU^2F \rightarrow KU^2FI^1$ 杵 [『倭名抄』の説明によって、「杵打」は《人の陰部を叩きつづす》とあるので、杵はここに男性の隠しどころである外生殖器、陰部を意味する、とした] [前の(G)句の $SAK-$ と同様に安萬侶が保存した $KU^2FA^1SI^3$ の声調パターンを守るため、 KU^2F という唯一の語幹を採用した]／ $FA^1SI^{1,2}$ 愛し [声調は実に未詳であるが、『大言海』によると、愛しは欲 (FO^1) しに通じるという暗示に従う]《麗しい。可愛らしい。愛くるしい。見るからにかわいい感じた。大切にする。愛する。大事にし、かわいがる》 ME^3 女 [前の(G)句の ME^3 を参照]／ $-WO^1$ を [前の(G)句の WO を参照]

「一句全訳」【男性の隠しどころを懐かしむ女性を……】

(J) 阿理登伎許志₁ $'A^1RI^2TO^1KI^2K\ddot{O}^2SI^3TE^1$

【従来の解釈】有りて聞こし $'A^1RI^2TO^1KI^2K\ddot{O}^2SI^3 TE^{1,2}$

【同意分節】 $'A^1RI^2 \cdot TO^1 \cdot KI^2K\ddot{O}^2SI^3 \cdot TE^{1,2}$

$'A^1RI^2$ 有り・在り [前の(H)句を参照]／ TO^1 を [前の(H)句を参照]／ $KI^2K\ddot{O}^2SI^3 \rightarrow$ 聞こし [聞くから派生した尊敬語。前の(H)句の $KIKASI$ を参照]／ $-TE^{1,2}$ っ [前の(D)句の $-TE$ を参照]

「一句全訳」【……いるとお聞きになって……】

(K) 佐用婆比邇 $SA^3YO^3BA^1FI^{1,2,3}NI^2$

【従来の解釈】を求婚ひに $SA^{2,1}YO^2BA^1FI^1NI^{1,2}$

【同意分節】 $SA^{2,1}YO^2BA^1FI^1 \cdot NI^{1,2}$

$SA^{2,1}$ を [名詞・動詞・形容詞につく接頭語]《語調を整えたり意味を強めたりする。愛すべき・若々しいといった情感を帯びる。時に雅語的に感じられるが、小・狭・少ない・ちょっと等という意味はない》 $YO^2BA^1FI^1$ 求婚ひ・婚ひ《夜、恋人のもとへ忍んで行くこと。相手の寝所へ忍び入ること。求婚する。求愛。言い寄ること》 $NI^{1,2}$ に《動作の目的を示す。……のために……》

「一句全訳」【夜、色女の寝所へ忍び入るために……】

(L) 阿理多々斯 $'A^1RI^2TA^1TA^1SI^1$

【従来の解釈】あり発たし $'A^1RI^2TA^1TA^1SI^1$

【同意分節】 $'A^1RI^2 \cdot TA^1TA^1SI^1$

‘A¹R² 有り・在り [前の(H)句を参照]／TA¹TA¹SI² 立たし・発
たし [TATU 立し・発しからの派生語。前の(H)句の KIKASI を参
照]《ある地点に自身の力でしっかり位置を占め、上方に向って身
をのばす。足でささえて直立する。あり通わせる。しげしげとお出
かけになる》

【一句全訳】【……しげしげとお出かけになり……】

(M) 用婆比邇 YO³BA¹FI^{2,3}NI²

【従来の解釈】 婚ひに YO²BA¹FI²NI^{1,2}

【同意分節】 YO²BA¹FI¹・NI^{1,2}

YO²BA¹FI¹ 婚 [前の(K)句の YOBABI を参照]／NI^{1,2} に [前の

(K)句の NI を参照]

【一句全訳】【求婚して、色女の寝所へ忍び入るために……】

(N) 阿理迦用婆勢 ‘A¹RI²KA¹YO³FA²SE³

【従来の解釈】 在り通はせ ‘A¹RI²KA²YO²FA²SE^{1,2}

【新分節】 ‘A¹RI²・KA²YO²FA²SE^{1,2}

‘A¹RI² 在り [前の(H)句の ‘ARI を参照]／KA²YO²FA²SE^{1,2} 通わ
せ [文章のすじみちが並行しているのび「かよはせ」の意味は多分
確かで、写字生の誤りを除くのに帮 KA²と破 FA²を応用する方が
よからう]《行き来させる。特に女性が夫・愛人を出入りさせる》

【一句全訳】【……通つてつけれ……】

(O) 多知賀遠母 TA¹TI^{1,3}GA³WO^{2,3}MO²

【従来の解釈】 太刀が緒も TA¹TI¹GA^{1,2}WO²MO^{1,2}

【同意分節】 TA¹TI¹・GA^{1,2}・WO²・MO^{1,2}

TA¹TI¹ 太刀《刀剣の総称》／GA^{1,2} が《名詞に付いて、所有・
所属・同格・分量・類似などの意を表わして、下の名詞を修飾する。
……の持っている。……に付いている。……の。……という。……
だけの》／WO² 緒《丈夫な繊維。物を貫き、物をしばるのに使
う》／MO^{1,2} も《承ける語を不確実なものとして提示し、下にそれ
についての説明・叙述を導く役目をする。格に関係なく、下文も、
打消・推量・願望などの不確実な表現で終るものが多い》

【一句全訳】【太刀の緒すら……】

(P) 伊麻陀登加受三 YI¹MA¹DA¹TO²KA²ZU²TE¹

【従来の解釈】 未だ解かず YI¹MA¹DA^{1,2}TO²KA²ZU²TE^{1,2}

【同意分節】 YI¹MA¹DA¹・TO²KA²ZU²・TE^{1,2}

YI¹MA¹DA¹ 未だ《事態が予想される段階に達しない意。まだ、
今なお。依然として》／TO²KA²ZU² 解かず《TO²KU² の活用形。
結んである紐などをゆるめる。締め固まっているものをゆるくし
て、流動できるようにする。動詞・助動詞の未然形を承けて「ず・
ぬ・ね」と活用し、承ける語の動作・作用・状態を否定す
る》／TE^{1,2} て [前の(D)句の TE を参照]

【一句全訳】【……まだ解かないで……】

(Q) 湊須比遠母 ‘O^{1,3}SU¹FI^{1,2,3}WO^{2,3}MO²

〔従来の解釈〕襲をも $^{\circ}O_2S\bar{U}_2F\bar{I}^1WO_{1,2}M\bar{O}_{1,2}$

〔同意分節〕 $^{\circ}O_2S\bar{U}_{1,2}F\bar{I}^1 \cdot WO_2 \cdot M\bar{O}_{1,2}$

$^{\circ}O_2S\bar{U}_{1,2}F\bar{I}^1$ 衣裾・襲〔襲（おそひ）上に重ねる衣）表襲という語源説が肯定される。けれども『類聚名義抄』は「おそひ」という異体を引用する。その声調パターンは $^{\circ}O_2S\bar{O}_2F\bar{I}^1$ であるから、写字生は、 $^{\circ}OS\bar{U}F\bar{I}$ のような転訛を聞いて、 $S\bar{O} \rightarrow SU$ の差別を超線状の面にも表わすようにしたので、 SU は SU^1 あるいは SU^2 にすべきだとためらったかも知れない〕《衣服の上にさらに頭からかぶる衣服で、男女共用。上着の一種》／ $-WO_2$ を〔前の(G)句を参照〕／ $-M\bar{O}_{1,2}$ も〔前の(O)句を参照〕

〔一句全訳〕【表襲をでも……】

(R) 伊麻陀登加泥 $Y\bar{T}^1MA^1DA^1T\bar{O}^1KA^1NE_{1,3}$

〔従来の解釈〕未だ解かね $Y\bar{T}^1MA^1DA_{1,2}T\bar{O}^1KA^1NE^2$

〔同意分節〕 $Y\bar{T}^1MA^1DA_{1,2} \cdot T\bar{O}^1KA^1NE_{1,3}$

$Y\bar{T}^1MA^1DA^1$ 未だ〔前の(P)句を参照〕／ $T\bar{O}^1KA^1NE_{1,3}$ 解かね〔前の(P)句を参照。ね語尾は打消の已然形。上代には已然形だけで「……から（ので）」の意味で順接の確定条件を表わす用法があったが、ふつうは已然形は接続助詞「ば」のついた形で、順接の確定条件の表現になる。真福寺本には、「ば」が出ていないが、諸伝本には「〜ねば」という語尾が見える〕《……から。……ので。……のに》

〔一句全訳〕【……まだ脱がないでいるのに……】

(S) 遠登壳能 $WO_2S\bar{T}\bar{O}^1ME^3N\bar{O}_{1,2}$

〔従来の解釈〕嬢子 \bar{O} $WO^1T\bar{O}_2ME^2N\bar{O}_2$

〔新分節〕 $WO_2 \cdot T\bar{O}^1M \cdot ME^3 \cdot NO_{1,2}$ 〔安萬侶の巧妙な暗示を認めて、「男求女の」にした〕

認めて、「男求女の」にした〕

WO_2 男・雄《おとこ》。男性／ $T\bar{O}^1M \rightarrow T\bar{O}^1ME^2$ 求め・尋め・覓め《尋ね求める》。さがす。追いかける／ ME^3 女〔前の(G)句を参照〕($T\bar{O}ME + ME \rightarrow T\bar{O}M + ME \rightarrow T\bar{O}ME$)／ $N\bar{O} \cdot \bar{O}$ 〔主語を示す用法〕

〔一句全訳〕【おとこたちに情欲をおぼえる娘が……】

(T) 那須夜伊多斗遠 $NA_{1,3}S\bar{U}^1YA^3Y\bar{T}^1TA^1TO_2WO_2S$

〔従来の解釈〕寝すや板戸を $NA_2S\bar{U}^1YA^3Y\bar{T}^2TA^1TO_2WO^1$

〔新分節〕 $NA_2S\bar{U}^1 \cdot YA^3 \cdot Y\bar{T}^1TA^1 \cdot TO_2 \cdot WO^1$

$NA_2S\bar{U}^1$ 寝す〔下二段動詞「ぬ」に尊敬の助動詞「す」がついて、音韻変化したもの〕《「ぬ」の尊敬語）おやすみになる》／ YA^3 や〔間投助詞。歌の途中に投入された。また、拍子を整えるに用いた〕〔疑問とか反語の意を表わす〕《……か。……だろうか。……はすである》／ $Y\bar{T}^1TA^1$ 痛〔形容詞の語根で、合成語に使われる〕《見苦しい。見るに堪えない。醜い。いたわしい。みすばらしい。痛ましい。痛々しい》／ TO_2 戸・門《家等の出入口。出入口に立てて、内と外を隔てるもの。と》／ $-WO^1$ 〔前の(G)句を参照〕

〔一句全訳〕【……寝ておられると思う家のみすばらしい戸を…

…】

(U) 游會夫良比 ${}^0\text{O}^1\text{S}\text{O}^1\text{BU}^1\text{RAFI}^1\text{A}^3$

〔従来の解釈〕押そ振らひ ${}^0\text{S}\text{O}^1\text{BU}^2\text{RAFI}^1$

〔新分節〕 ${}^0\text{S}\text{O}^1 \cdot \text{BU}^1\text{RAFI}^1$

${}^0\text{S}\text{O}^1$ 押そ〔動詞 ${}^0\text{SU}$ の動名詞形。あるいは ${}^0\text{S}\text{OFI}$ という動作の反復の意を表わす派生語の不完全な形態素 ${}^0\text{S}\text{O}^1\text{F}$ で、次の FURAFI を承けるため ${}^0\text{S}\text{O}^1\text{F} \cdot \text{FURAFI} \rightarrow {}^0\text{S}\text{O}^1\text{FURAFI} \rightarrow \text{OS}\text{O}^1\text{BURAFI}$ になったもの〕《圧力をかける。押さえつける。かたく圧する。おそいかる。せめかる》 $\text{BU}^1\text{RAFI}^1 \leftarrow \text{FU}^1\text{RAFI}^1$ 触らひ〔安萬侶の声調パターンを認めた表記〕 $[\text{FU}^1\text{RI}^2]$ という動詞の未然形につく助動詞 $-\text{FI}$ 、 $-\text{FU}$ の派生語で、動作の反復の意を表わす。又は「触り+合ひ」から $\text{FUR} + \text{AFI} \rightarrow \text{FUR} \cdot \text{AFI} \rightarrow \text{FURAFI}$ になったもの〕《繰り返し触れる。何度も触れる》

〔一句全訳〕【……かたくおそえ付けたり、何度も手強く接触した
りするの……】

(V) 和何多々勢社婆 $\text{WA}^1\text{GA}^2\text{TA}^1\text{TA}^1\text{SE}^3\text{RE}^2\text{BA}^1$

〔従来の解釈〕我が立たせれ $\text{WA}^1\text{GA}^2\text{TA}^1\text{TA}^1\text{SE}^2\text{RE}^2$

BA^1A^2

〔新分節〕 $\text{WA}^1\text{KA}^1\text{T} \cdot \text{TA}^1\text{TA}^1\text{SE}^2\text{RE}^2 \cdot \text{BA}^1\text{A}^2 \rightarrow \text{WA}^1\text{KA}^1\text{TA}^1\text{TA}^1\text{SE}^2\text{RE}^2 \cdot \text{BA}^1\text{A}^2$

$\text{WA}^1\text{KA}^1\text{T} \leftarrow \text{WA}^1\text{KA}^1\text{T}^1$ 別々・分々〔『類聚名義抄』によ

て「我が」は WA^1GA^2 と訓む。又、前の(O)句の「太刀が」は $\text{TA}^1\text{T}^1\text{GA}^3$ と表記されている。「何 GA^1 」は以上の前後の関係の中で完全に疑わしい〕《切り離して、別々にする。はなつ。分ける。別れる》更に「河・賀」は音仮名の表記として、両方とも「KA」と GA の二つの音がある。GA は呉音で、KA は漢音なので「何」も同じ配分を持っているから、ここに WAKAT と敢えて読む決意に従った。そこで、西宮一民氏などの注解者の外観上の問題すなわち「自敬表現」のまことに奇妙な現象は無内容になる。という、「立たせれば」などという語は、一人称名詞がその前に表わされているけれど、述語が敬語の形に残っている。私にとっては、こういうふうに唯名論者の間で有名なオッカムの剃刀を当てて、彼の思惟経済の法則「存在は必要性なしに増加されてはならない」が励行され、安萬侶の遺言の追憶も実現されてしまったのだ〕 $\text{TA}^1\text{TA}^1\text{SE}^2$ 立たせ〔立つ TA^1TU^2 からの敬語。前の(L)句の TATASI を比較された。後者は軽い尊敬・親愛の意。前者は使役・敬意などの意を表わす〕《お立ちになる。立ちなされる。「れ」の前で未然形を示す》 $-\text{RE}^2$ れ〔SE の使役動詞に続く已然形の語尾。すなわち、尊敬動詞を構成する $-\text{SU}$ という語尾は下二段に活用するものとして「す・する・すれ・せ・せよ」という活用形にはまっぴる〕 $-\text{BA}^1\text{A}^2$ ば〔已然形について、順接の確定条件を表わす〕《……ので。……だから》〔ある事柄に続いて、次の事柄が起

る」《……すると。……したところ》

【一句全訳】【あの場所が遠ざかるように、お立ち去りになったところ……】

こゝ……】

(W) 比許豆良比 $FI_{1,2,3}K\ddot{O}_2DU^3RAFI_{1,2,3}$

【従来の解釈】引こ連合心 $FI^2K\ddot{O}_2DU^2RAFI^2$ 【『大言海』によつて、「引こ釣らひ」に当たる】

【新分節】 $FI^2K\ddot{O}_2 \cdot DU^2R \cdot A^1FI^2$ 【連合心】の意味は、文の前後の関係を顧みない】

$FI^2K\ddot{O}_2$ 引こ「引くから派生した動名詞」《手で持って、自分の方へ寄せる。ひっぱり出す。ひきずる。ひき移す》《ひっぱり出すよう（こと）。ひきずるよう（こと）。ひき移すよう（こと・ところ）》 $DU^2R \rightarrow TU^2RU^1$ 釣る《引いているように一ヶ所に寄せる》 $A^1FI^2 \rightarrow A^1FI^2$ 合い【他の動詞の連用形にいたり、連用形を省略したりして】《一緒に……する。たがいに……する。何度も……する》

【一句全訳】【……何度もあれこれとひき移すように、力を入れて引っばってみるうちに……】

(X) 和何多々勢礼婆

【この句は、(V)句の完全な反復だから、同句の新分節と一句全訳を参照】

(Y) 阿遠夜麻邇 $A^1WO_{2,3}YA^3MA^1NI^2$

【従来の解釈】青山 $A^1WO^1YA^1MA^1NI^2$

【新分節】 $A^1W \cdot WO^2Y \cdot YA^2MA^1 \cdot NI^2$

$A^1W \rightarrow A^1FI^2$ 会ひ・逢ひ《出会う。対面する。来あわせる。男女が契る。結婚する。夫婦の交わりをする》【実際には $A^1W \cdot WOY$ は $A^1F \cdot WOY$ の接触で $-F-$ という無声の摩擦音は、次の $-W-$ という有声摩擦音の影響で、逆行同化法的に有声化されて、 $A^1W \cdot WOY$ になつてから $-W+W-$ は脱促音化してから A^1WOY に化する。あるいは、促音便となつても、それを表記するくふうはまだされていなかった】 $WO^2Y \rightarrow WO^2Fe^1$ 【終へ】の不完全な形態素】《終わる。終わらせる。あることの経過をするうちにやめる》【 WOY - $YAMA$ は WOF - $YAMA$ の接触で $-F-$ という無声両唇摩擦音は、続く $-Y-$ という有声口蓋摩擦音の影響で逆行同化法的に有声口蓋化されて WOY - $YAMA$ になつてから $-Y+Y-$ は脱促音化して $-WOYAMA$ に化する】 $YA^2MA^1 \rightarrow YA^2MU^1$ 止む【 $YAMU$ から派生されたA形の動名詞。例えば、 $MURU$ 群から $MURA$ 群・叢・聚・村になった同類変化】《中止になったところ。絶えること。続いたものがとまること。物事が遂行しないこと》 $-NI^2$ に【前の(F)句の $-NI$ を参照】

【一句全訳】【逢引きが遂行せぬうちに中止になったところに…

…】

(Z) 奴延波那伎奴 $NU^1YE_{1,3}FA^1NA_{1,2,3}KI_{1,2}NU^1$

〔従来の解釈〕鶴は鳴きぬ $\text{NU}^2\text{YE}^2\text{FA}^{1,2}\text{NA}^2\text{KI}^1\text{NU}^{1,2}$

〔新分節〕 $\text{NU}^1\text{YE}^{1,3} \cdot \text{FA}^1 \cdot \text{NA}^{1,2,3}\text{KI}^{1,2} \cdot \text{NU}^1$

$\text{NU}^1\text{YE}^{1,3}$ 萎え〔次の(ホ)SK 48.4—(3)句にはヌエクサ萎草という合成語があつて、古語辞典によると、ノエクサとも発音される。

ノエはまたナエの母音交替形で、《なよなよとした草。やさしい女性にたとえる》その暗示を利用して、ヌエをナエのバリエーションと認める〕《なよなよとしてゐるところ。力なく、ぐったりしてゐる》

— FA^1 は〔前の(B)句の— FA を参照〕 $\text{NA}^{1,2,3}\text{KI}^{1,2} \rightarrow \text{NA}^2\text{KI}^1$ 泣き《人間が声を立てて、涙を流す》— NU^1 ぬ〔動詞および助動詞の連用形を承ける助動詞。— TU と並んで動作・作用・状態の完了を示す。だが、— NU は、自然推移的・無作為的な意味を持つ動詞を承ける傾向のあることが明らかである〕《……た。……てしまう。必ず……する。確かに……する》

〔一句全訳〕【ぐったりとなつて、わっと泣き出すようになった。】

(A) 佐怒都登理 $\text{SA}^3\text{NO}^2,3\text{TU}^1\text{TÖ}^1\text{RI}^2$

〔従来の解釈〕を野の鳥 $\text{SA}^2\text{NO}^1\text{TU}^{1,2} \text{ TÖ}^2\text{RI}^2$

〔新分節〕 $\text{SA}^3 \cdot \text{NO}^2,3 \cdot \text{TU}^1 \cdot \text{TÖ}^1\text{RI}^2$

$\text{SA}^3 \rightarrow \text{SA}^{2,1}$ ぬ〔前の(K)句の— SA を参照〕 $\text{NO}^2,3$ 〔野の NO^1 は不適切だから、 NE 寝の動名詞形 NO^2 であると仮定する〕 $\text{SA}^{2,1}$ NO^2 を寝〔ぬ(寝)の母音交替の結果〕《幸福を施す共寝》 $\text{TU}^1 \rightarrow \text{WU}^2\text{TU}^1$ 棄る〔前音節 WU を脱落させること、生 WUMU

ウム→ム MU^1 潮 WUSIFO ウシホ→シホ SIFO の類〕《そのままにして顧みない。すてる。見捨てる》 $\text{TÖ}^1\text{RI}^2$ 捨り《捕えたもの。取り子。もらい子。養子。婿に迎えた男。虜》

〔一句全訳〕【幸福を施す共寝を、そのままにして、思い止まらせた虜ぞ。】

(B) 岐藝斯波登与牟 $\text{KI}^1\text{GI}^3\text{SI}^1\text{FA}^1\text{TÖ}^1\text{YÖ}^3\text{MU}^1$

〔従来の解釈〕雉は響む $\text{KI}^2\text{GI}^3\text{SI}^2\text{FA}^{1,2}\text{TÖ}^1\text{YÖ}^3\text{MU}^1$

〔新分節〕 $\text{KI}^1 \cdot \text{GI}^3 \cdot \text{SI}^1 \cdot \text{FA}^{1,2} \cdot \text{TÖ}^1\text{YÖ}^3\text{MU}^1$

$\text{KI}^1 \rightarrow \text{YI}^2\text{KI}^1$ 行き・往き〔 YI^1 の脱落の前例は前の(G)句の KASI を参照〕《その者の現在地を離れて、移動する》 $\text{GI}^3 \rightarrow \text{KI}^2$ 来《来る。来たる。帰る。戻る。距離的・時間的に近づく》〔 YUKI-KI 行き来という異形も古語辞典に出ているが前脱落の用法の例は多い〕 SI^1 風《かぜ。大気の流れ》— $\text{FA}^{1,2}$ は〔— FA の前例は、前の(B)句を参照〕 $\text{TÖ}^1\text{YÖ}^3\text{MU}^1$ 響む〔問題の三音節のことは、原文のままの声調パターンは注解者の仮名交じり文のそれとは差別が大きい、資料不足のため、他のパターンと交替する根拠がなくて、そのままに置くに他ならぬ。SK 51.5-34 $\text{TÖ}^1\text{YÖ}^3-\text{MI}^2\text{KI}^2$ 豊御酒という合成語があるが、また「響み」と同根である $\text{TO}^1\text{YÖ}^3$ の声調が現われる〕《鳴りひびく。ひびきわたる。鳴りひびかせる。音をたてる》

〔一句全訳〕【……と移り変わって行ったたり来たりする風は、あた

り一面に鳴り響くようだ。】

(C) 尔波都登理 NI²FA¹TU¹TÖ¹RI²

【従来の解釈】庭へ鳥 NI²FA²TU² TÖ²RI²

【新分節】NI²F・A¹TU¹・TÖ¹RI²

NI²F・↑NI²FI¹ 新【接頭語】《まだ誰も手をつけていない。未経験の。未熟な》／A¹TU¹↑熱《温度が高いさま。熱がある。暑気はげしい。物に触れてみると、その温度が高く、強い刺激をつける状態である》／TÖ¹RI² 擒り【前の(A)句のTÖ¹RIを参照】

【一句全訳】【未経験の熱望している虞ぞ】

【この形容辞の前の SANOTU・TÖ¹RIと同様に情欲の神（→YATIFOKÖ）に関連するようであるので、中傷・悪口・名誉汚損・毀損に見えそうなので、擬装されて「庭へ鳥」などの形を帯びているかもしれない】

(D) 迦祁波那久 KA¹KE^{1,2}FA¹NA^{1,2,3}KU²

【従来の解釈】雞は鳴へ KA²KE²FA^{1,2}NA²KU¹

【同意分節】KA¹KE^{1,2}・FA¹・NA^{1,2,3}KU²

KA²KE² 雞《NIWATÖ¹RIの古名。鳴き声による名称》【声調パターンが未詳であるが、従来の注解者の推測に同意】／FA^{1,2}は【FAの前例は前の(B)句を参照】／NA^{1,2,3}KU² 鳴へNA²KU¹【原文と注解文の活用語尾の声調は違うが、望月郁子著『類聚名義抄の文献学研究』の六二九頁によれば、「高起式四段活用動詞における終

止形と連体形との区別は（中略）諸本相互に先後する傾向がありそうである。」などと説明して、後に「四段活用の動詞のいいきりになるかたちの語末のかなに上声点と平声点との二つの声点のついてる事例がある。」すなわち NAKU の終止形は 2・1 で連体形は 2・2 と高くおわるが、両方とも交えて使われるものになった《けものや鳥、虫などが声や音を発する》

【一句全訳】【……と鶏が鳴きそうである。】

(E) 宇礼多久母 WU²RE²TA¹KU²MÖ²

【従来の解釈】心痛へも WU¹RE¹TA¹KU²MÖ²

【新分節】WU²RE²・TA¹KU²・MÖ²

WU²RE²←WU²RA² 雛の[WU²RU¹から派生した動名詞]《ウルこと。ウルとこと》【「雛る」は「恨む。怨みを抱く。怨めしく思ふ」WURA+YITAKU→WURETAKUが、-A+YI=-E, NAGAYIKI→NAGEKI となること、SA, TA, NA, RA, WA, の場合 SE, TE, NE, RE, WE が規則である】／TA¹KU²←YI¹TA¹KU² 痛へ・恫へ・烈へ・甚へ[YI は先行の WURA と接触して WURE になる]《非常に。はなはだしく。心に苦しく感ずる。あつく》／MÖ²も【形容詞の連用形につく【も】は、感動・詠嘆を表わす】《く・も→……うことどもまめ》

【一句全訳】【怨めしくて痛ましくうことどもまめ。】

(F) 那久那留登理加 NA^{1,2,3}KU²NA^{1,2,3}RU^{1,2}TÖ¹RI²KA¹

【従来の解釈】 鳴くなる鳥か $NA^2KU^1NA^2RU^2\bar{T}O^2RI^2KA^1$

【新分節】 $NA^2KU^2 \cdot NA^2RU^2\bar{T}O^2RI^2 \cdot KA^1$

NA^2KU^1 泣く [前の(2)句の $NAKI$ の終止形] NA^2KU^2 は動名詞の機能での声調 $\bar{N}A^2RU^2\bar{T}O^2RI^2$ なる [動詞・助動詞の終止形を承ける。これは、指定の助動詞「なり NA^1RI^2 」とは別で、伝聞・推定の「なり」といわれる。活用はラ変型である。意味は音響を頼りにして、それによって「……うしろ。……のよう」などと推量の判断を下す用法になる] $\bar{N}A^2KU^1NA^2RU^2\bar{T}O^2RI^2$ 泣くなる《泣くうしろ。泣くようである》 $\bar{T}O^2RI^2$ 泣り [前の(2)句の $TORI$ を参照] $\bar{K}A^1$ か [体言などに付く終助詞。詠嘆・感動を表わす]《……だなあ。……であればいいなあ。……ではないかなあ》

【一句全訳】【まさに、それは泣いているらしい虜自身ではないのかなあ。】

(5) 許能登理母 $KO^2NO^2\bar{T}O^2RI^2MO^2$

【従来の解釈】 此の鳥も $KO^2NO^2\bar{T}O^2RI^2MO^2$

【新分節】 $KO^2 \cdot NO^2 \cdot \bar{T}O^2RI^2 \cdot MO^2$

KO^2 此・是 [近称の指示代名詞]《これ。ここ。こちら》 $\bar{N}O^2$ の [存在の場所を示す連体助詞] KO^2NO^2 此の《話し手に属するもの、また空間的・心理的に話し手に近い物事・場所・人などをさす連体詞。直前に話題になった物事をさす語。以前に話題になった物事をさす語。今の「あの・その」にもあたる》 $\bar{T}O^2RI^2$

泣く [前の(5)句の $TORI$ を参照] $\bar{M}O^2$ も [前の(5)句の $\bar{M}O$ を参照]

【一句全訳】【この泣いている虜にもなあ。……】

(H) 宇知夜米許世泥 $WU^2TI^1YA^3ME^2KO^2SE^3NE^3$

【従来の解釈】 打止めしや $WU^1TI^2YA^2ME^2KO^2SE^3NE^3$

【新分節】 $WU^2TI^1 \cdot YA^3ME^2 \cdot KO^2SE^3 \cdot NE^3$

WU^2TI^1 内・中《奥のほう。内部。内がわ。仕切った線の手前範囲内。心の中》 YA^3ME^2 止め [「」の連用形]《やむようにする。続いている状態や動作を途絶させる。病氣・癖などをなおす》 $\bar{M}E^2$ の語尾の高平調は未詳。 KO^2SE^3 の影響か $\bar{K}O^2SE^3$ 来せ [助動特殊型。動詞の連用形に付いて、他にあつらえ望むという意を表わす。コス・コセ・コンの形を帯びるが、ここは「ね」の前に未然形を承ける。語源はあいまいだから、声調も不確かである]《……してくれ。……してほし》 $\bar{N}E^3$ ね《活用語の未然形を承けて、希求・詠えの意を表わす。「な・なも」に比較して、相手を敬い、相手に親愛の意をこめた語であった》

【一句全訳】【その心の底まで及んで、元氣をつけてほしいねえ。】

(I) 伊斯多布夜 $YI^1SI^1TA^1FU^3YA^3$

【従来の解釈】 い慕ふや $YI^1\bar{S}I^2TA^2FU^1YA^2$ $\bar{S}I^2TA^1FU^1YA^2$

【日本古典文学全集の『古事記』は、同句を次句のアマハセツ

カヒの枕詞とみなし、語義未詳と示す]

〔新分節〕 YF¹・SF¹・TA¹FU²・YA²

YF¹ 斎《神聖であること。タブーであること》／SF¹ 風「前の(B)句のSIを参照」／TA¹FU²→WU¹TA²FU^{1,2} 訴ふ「声調パターンは不安定だが、TAFUのパターンは1・1, t・1, 2・1もあり、原文の見出し語の1・2のパターンは多分連体形を示す。前音節WU-の脱落は、類例が多い。潮 WUSIFO↕SIFO 生 WUMU↕MU など」《申し立てる。訴える。申し出る。事情や不平・要求などを神や上司・世人に告げて、判断や救助を期待する。》／YA² 哉「係助詞。文末にある場合、活用語の連体形・連用形に付く」《反語の意を表わす。……(だろう)か、いやそんなことはない》

〔一句全訳〕【神聖な風が遺恨を取りあげて伝えることにや……んや、それは信じえない】

(J) 阿麻波勢豆加比 'A¹MA²FA¹SE²DU³KA¹FI^{1,2,3}

〔従来の解釈〕天馳使 'A¹MA²FA¹SE²DU²KA²FI²

〔表記の意義は疑わしい。日本思想体系の「古事記」によると

不利な説]

〔新分節〕 'A¹M・A¹FA¹SE²・DU²K・A¹FI¹

'A¹M→'A¹MI² 編み《組み合わせて物を作る。からみあわせて物を作る。打ち違えて編む。編集する。文章を作る》／-A¹FA¹SE²→-A¹FA¹SE² 合はせ「合心の他動詞形」《二つのものをひいたり

と寄りつかせる。出合わせる。目あわせる。適合させる。比べる》／DU²K→TU²KI¹ 尽き「合成語の中に濁音-D-と-T-の脱落が必要になった」

〔名詞に付いて、その力を働かせる意〕《その限りを尽す。それ次第、その結果の意を表わす》／-A¹FI¹→'A¹FI¹ 合ひ《いっしょになる。調和する。適合する。似合う》

〔AFIの1・1の声調パターンは、動名詞の用法を示すようである〕

〔一句全訳〕【言葉を組み合わせる才能を躍動させたり、時宜にかなわせたりするところ。】

(K) 許登能 KÖ²TÖ¹NÖ^{1,2}

〔従来の解釈〕事の KÖ²TÖ¹NÖ¹

〔新分節〕 KÖ²TÖ¹・NÖ¹

KÖ²TÖ¹ 同・如《同じの意。一つこと。同一。相等しいこと。類似していること》／-NÖ^{1,2}の「主語を示す用法か」

〔一句全訳〕【以上のような活躍に相等しいことである何事も…

…】

(L) 加多理其登母 KA¹TA¹RI²GÖ¹TÖ¹MÖ²

〔従来の解釈〕語言の KA²TA²RI¹GÖ¹TÖ¹MÖ^{1,2}

〔新分節〕 KA¹T・A¹RI²・GÖ¹TÖ¹・MÖ²

KA¹T→KA¹TA¹ 片「接頭語。「真・双」の対になる語」《対

のものの一方。半分。不完全なこと。少ないこと。一方にかたよること。ひとり。わずか。片一方。片方。中途半端なこと。中央を離れたこと。整わないうこと／ $-A^1R^2 \rightarrow -A^1R^2$ 在り「前の(H)句の $-ARI$ を参照」／ $-G\ddot{O}T\ddot{O}^1 \rightarrow K\ddot{O}T\ddot{O}^1$ 言《言葉。口先だけの表現。言い伝えていることば。和歌。発声》／ $-M\ddot{O}^2$ も「前の(O)句の $-M\ddot{O}$ を参照」

【一句全訳】【中途半端になっていることばであっても……】

(M) 許遠婆 $K\ddot{O}^2WO^2_3BA^1$

【従来の解釈】是をば $K\ddot{O}^2WO^1BA^{1,2}$

【同意分節】 $K\ddot{O}^2 \cdot WO^1 \cdot BA^1$

$K\ddot{O}^2$ 是「前の(S)句の $K\ddot{O}$ を参照」／ $-WO^1$ を《動作の対象の下について、それを確認するためにこの語が投入された。そこから目的格の用法が生じた》／ $-BA^1$ ば「係助詞「は」が格助詞「を」に付いて、濁音化したもの」【前の(B)句の $-FA$ を参照】

【一句全訳】【この歌を詠じるものである。】

【(I)句から(M)句までの一連は、伝統に語り継がれた結尾語・下文で、それ以上の歌謡は出雲国の語部が作っていた歌と見るべきであろう】

【全歌全訳】【制御できない色欲の最大限を引き起こす活力という所有物を淘汰なさる霊に当たる神聖なる天命被害者自身は、多くの

島がある国の中に四方の壁に籠もりたがる乙女と共寝しかねても、はなはだいといひ越という国に相手の心にあてて、幸福の感覚を活気づけることのできる女性がいるとお聞きになって、男性の隠し所を懐かしむ女性がいるとお聞きになって、夜、色女の寝所へ忍び入るためにしげしげとお出かけになり、求婚して色女の寝所へ忍び入るために通いつづけられ、太刀の緒すらまだ解かないで、表裏をでもまだ脱がないでいるのに、男たちに情欲をおぼえる娘が寝ておられると思う家のみすばらしい戸をかたく押さえ付けたり、何度も手強く接触したりするので、あの場所から遠ざかるように、お立ち去りになったところ、何度もあれこれとひき移すように、力を入れて引っ張ってみるうちに、あの場所から遠ざかるように、お立ち去りになったところ、逢引きが遂行せぬうちに中止になったところにぐったりとなって、わっと泣き出すようになった。「幸福を施す共寝を、そのままにして、思い止まらせた虜ぞ」と移り変わって行ったり来たりする風は、あたり一面に鳴り響くようだ。「未経験の熱望している虜ぞ」と鶏が鳴きそうである。怨めしくて痛ましいことにもまあ。まさにそれは泣いているらしい虜自身ではないのかなあ。この泣いている虜にもなおさら、その心の底まで及んで、元気を付けてほしいねえ。

神聖な風が遺恨を取りあげて伝えることにや……いや、それは信じえない。言葉を組み合わせる才能を躍動させたり、時宜にかなわ

せたりするところで、以上のような活躍に相等しいことである何事も中途半端になっていることばであっても、この歌を詠じるものである。】

(ホ) SK 48.4 沼河北売の言明

夜知富許能／迦微能美許等／奴延久佐能／売迹志阿礼婆／和何許々呂／宇良須能登理叙／伊麻許曾婆／和杼理迹阿良米／能知波／那杼理爾阿良牟遠／伊能知波／那志勢多麻比曾／伊斯多布夜／阿麻波世豆迦比／許登能／加多理基登母／許遠婆

(1) 夜知富許能 YA³TI^{1,3}FO³KÖ²NÖ^{1,2}

【全句が SK 47.2—(A)句と同一で、その項参照】

【一句全訳】【制御できない色欲の最大限を招く者】

(2) 迦微能美許等 KA¹MI¹NÖ^{1,2}MI²KÖ²TÖ²

【従来の解釈】神の命 KA¹MI¹NÖ¹MI²KÖ²TÖ²

【同意分節】KA¹MI¹・NÖ¹・MI²・KÖ²TÖ²

KA¹MI¹・NÖ^{1,2} 神の [SK 47.2—(B)句を参照]／MI²KÖ²TÖ² 命

【SK 47.2—(B)句の声調パターンは MI²KÖ²TÖ² で今の声調パターンは写字生の手落ちではないかと仮定することもできる。現在の著者の見地からは、それはむしろ写字生の意見の解明の新事実を表わ

す試みだったろうと思う】《天つ神のさしず・言いつけ・お告げ。天命。天の意向を自分の責任として自覚したもの》【今度の MI²KÖ²TÖ² の語源説は「御事・御言」ではなく、この場合の声調は MI²KÖ²TÖ² だろうとする。思うに、「御 MI²」はそのままで残って、KÖ²TÖ² は型・形・象の異形ではないかと見なし、「きまった形式。模範としてまねた形・模型・手本」とか「天から授かった生きる定め」とか意味すべきである】「撓トヲヲ・タワワの類の母音交替形」

【一句全訳】【活力という所有物を淘汰なさる靈に当たる神聖な天命被害者……】

(3) 奴延久佐能 NU¹YE^{1,3}KU²SA³NÖ^{1,2}

【従来の解釈】萎草の NU^{1,2}YE^{1,2}KU¹SA¹NÖ¹

【新分節】NU¹YE^{1,3}・KU²SA³・NÖ^{1,2}

NU¹YE^{1,3} 萎え [SK 47.2—(Z)句の NUYE を参照]／KU²SA³ 瘡《かき。梅毒。皮膚にできるできもの・はれものなど》／NÖ^{1,2} 《所属しているものの属性を持つことを示す用法》

【一句全訳】【手足の力がぬけて、正常に働かなくなつて、腫れ物

がちである……】

(4) 売迹志阿礼婆 ME³NI²SI³A¹RE²BA¹

【従来の解釈】女にしがねば ME³NI^{1,2}SI¹A¹RE²BA^{1,2}

【同意分節】ME³・NI^{1,2}・SI¹・A¹RE²・BA^{1,2}

ME³ 女《女性。女子。婦人。処女。少女。宮廷に奉仕する若い宮女》／NI^{1,2}に「断定の助動詞「なり」の連用形」《にて。で。では》／SI²し「副助詞または間投助詞。語調を整え、強意を表わす。体言や活用語の連体形・連用形・副詞・助詞などにつく」／ARE²在れ・有れ「A¹RI²の已然形」SK 47.2—(H)句を参照／BA^{1,2}ば [SK 47.2—(A)句の-BAを参照]

「一句全訳」【……とうような娘であるのび……】

(5) 和何許々呂 WA^{1,3}KA¹KÖ²KÖ²RÖ²

「従来の解釈」我が心 WA¹GA²KÖ¹KÖ¹RÖ²

「新分節」WA^{1,3}・KA¹K・Ö²K・Ö²RÖ²

WA¹ 我《一人称。わたし。私。自身。われ。おれ》／KA¹K-↑KA¹KE² 懸け《離れたり動いたりしないように固定する。一点にくっつけ、食い込ませて、物の重みのすべてをそこにゆだねる》「何」という仮名字母は多分清濁両方にまたがって用いられたものだったと思う。そうでないとすれば、ここも前の SK 47.2—(V)句の類例も、濁音の「が」という読み方は元来注釈者の誤解の結果と認めて改正すべきであろう」／Ö²K-↑Ö²KI¹ 置き《残しとどめる。あとに残す。家に居させる》／Ö²RÖ²↑WO²RÖ² 居ろ「WO²RI¹から派生した動名詞」《じっと坐っているところ。じっと坐りつづける。存在する。いる。ある》「前の子音と接触するため、W-は脱落させて、-O-は乙類の-O-になる規則があったようだ」

「一句全訳」【それ故に、私としては離れたり動いたりしないように、ここに掛け籠もったままで居させられて、否でも応でも、じっと坐りつづけるところである。】

(6) 宇良須能登理叙 WU²RA¹SU¹NÖ^{1,2}TÖ¹RI²ZÖ²

「従来の解釈」浦洲の鳥を WU¹RA¹SU¹NÖ¹TÖ²RI²ZÖ²

「新分節」WU²RA²・SU¹・NÖ^{1,2}・TÖ¹RI²・ZÖ²

WU²RA² 雛・鶯 [SK 47.2—(E)句を参照。注釈者の誤解のため、いわゆる重要語と見なした「浦・裏」の影響で-RA¹の仮名字母を用いたと考えられる]《怨みあう関係にある。周囲のうらみを集中する》／SU¹ 栖・巢《ものの集まっている場所。鳥獣虫類などのすみか。人の住居》／WU²RA²・SU¹ 鶯栖《怨みあう関係にある家。周囲のうらみを集中する住処》／NÖ^{1,2}の「存在の場所を示す連体助詞」／TÖ¹RI² 擒り [SK 47.2—(V)句のTÖ¹RIを参照]／ZÖ²ぞ「係助詞」《他の何物でもなく、まさにそのものであるという意味での強調》

「一句全訳」【まさに周囲の怨みを集中する住みに囲まれた虜のようぞ】

(7) 伊麻許曾婆 YI¹MA¹KÖ²SÖ¹FA¹

「従来の解釈」今こそは YI¹MA²KÖ²SÖ¹FA^{1,2}

「新分節」YI¹・MA¹K・KÖ²SÖ¹・FA^{1,2}

YI¹ 斎 [SK 47.2—(J)句のYIを参照]／MA¹K-枕 [SK 38.6—(C)

句の MAK- を参照] / KÖSÖ: こそ [強調接続表現。「……こそ…
 …已然形」の形が文中に挿入されている場合は、已然形の部分で
 文が終止せず、逆接の条件句となって、その事態を強調し、以下に
 続いていく] 《確かに……は……だが……》 / -FA^{1,2} は「他の係助
 詞「ぞ・なむ・こそ」とは少し異なった強調の意味を持つ。「は」
 《こちらは……だが、むこうは……である》「それに対して」「ぞ・な
 む・こそ」《他の何ものでもなく、まさにそれが……である》と特
 別に取り立てて強調する。このために、「は」だけは他の係助詞と
 重ねて用いることができる]

【一句全訳】【確かに神聖な交接中には……】

(8) 和杼理迹阿良米 WA^{1,3}DÖ²RI²NI²A¹RA¹ME²

【従来の解釈】我鳥にあらむ WA¹DÖ²RI²NI²A¹RA¹ME²

【同意分節】WA¹・DÖ²RI²・NI²・A¹RA¹・ME²

WA¹ 我・吾 [接頭語の用法では、相手と呼ぶ語に冠して、相手
 に対する親愛の情、または、軽んじ卑しめる気持ちを表わす。ここ
 は、比喩的にたとえた言い方である] 《自分自身の自由な身の上で
 ある。自分勝手に振舞う。自分の考えだけの。わがままにする。自
 由にふるまう。自分の心境によってする。自分の考えどおりにす
 る》 / DÖ²RI² → TÖ²RI² 鳥《空を飛ぶ動物。ここは、陽気に暮す女
 性の直喩》 / WA¹-DÖ²RI² 我鳥《自分の心境によってふるまう
 鳥》 / -NI² 【前の(4)句の -NI を参照] / -A¹RA¹ 在ら [在りの未然

形。SK 47.2-1(H)句を参照] / ME² め [助動詞「む」の已然形。推
 量の意を表わす] / A¹RA¹・ME² 在らめ《あろう。だろう》

【一句全訳】【私は自分の心境によって行儀作法を守るだろうが…
 …】

(9) 能知波 NÖ^{1,2}TI^{1,3}FA¹

【従来の解釈】後は NÖ¹TI¹FA^{1,2}

【同意分節】NÖ¹TI¹・FA^{1,2}

NÖ¹TI¹ 後《後刻。以後。将来。死後。あと。来世。死んだあと。
 つぎに生まれかわるといふ世》 / -FA^{1,2} ち [SK 47.2-1(B)句の -FA
 を参照]

【一句全訳】【死んだあと、つぎに生まれかわるといふ世には…

…】

(10) 那杼理爾阿良半遠 NA^{1,2,3}DÖ²RI²NI²A¹RA¹MU¹WO^{2,3}

【従来の解釈】汝鳥にあらむを NA²DÖ²RI²NI²A¹RA¹MU^{1,2}

WO²

【同意分節】NA²・DÖ²RI²・NI²・A¹RA¹・MU^{1,2}・WO²

NA² 汝 [代名詞] 《おまえ。自分より目下の者や親しい人に対し
 て用いる。あなた》 [ここは、比喩的な言い方である] 《あなたの意
 に従う。あなたの心によってふるまう。あなたの思いのままにす
 る》 / DÖ²RI² 鳥 [前の(8)句の -DÖ²RI を参照] / NI² に [前の(4)句
 の -NI を参照] / -A¹RA¹ 在ら [前の(8)句の ARA を参照]

／-MU^{1,2}む「推量の助動詞。活用語の未然形に付く。」「む」の形は終止形と連体形】《……のだろう。……う。……よう。……ような。……ようである。……のがよい。……ないか》／-WO²を「文末に用いられるとき、感動・詠嘆を示す」《なあ》

【一句全訳】【万事はあなたのお心のままになるようであるなあ。】

(11) 伊能知波 YI¹·NÖ^{1,2}·TI^{1,3}·FA¹

【従来の解釈】命は YI¹·NÖ¹·TI²·FA^{1,2}

【新分節】YI¹·NÖ¹·TI¹·FA^{1,2}

「声調はさわしいが、文脈によれば、前の NÖ¹TI¹と一致すると思う。YI¹·NÖ¹TI¹斎・後《神聖な来世》。[思うに、「後」は「命イノチ」と共に縁語をなしているが、同時に「イノチ」という言葉に二つの意味をもたせたものであるので、掛詞の修辭法の一例である]

YI¹斎 [SK 47.2-1]句の YI¹を参照／NÖ¹TI¹後 [前の(9)句の NÖ¹TI¹を参照]／-FA^{1,2}は [SK 47.2-1(B)句の -FA¹を参照]

【一句全訳】【神聖な来世に新生する枢要な行方は……】

(12) 那志勢多麻比曾 NA^{1,2,3}·SI³·SE²·TA¹·MA¹·FI^{1,2,3}·SÖ¹

【従来の解釈】な死せ給ひそ NA³·SI²·SE²·TA¹·MA¹·FI²·SÖ²

【同意分節】NA³·SI²·SE²·TA¹·MA¹·FI^{1,2,3}·SÖ²

NA³・な【副詞。動詞の連用形（カ変・サ変は未然形）の上に付

いて、下の終助詞「そ」を伴い、「な……そ」の形で、その動詞の

表わす動作を禁止する意を表わす】《するな……。……してくれるな》／SI²死・殺《死。死ぬこと。殺されること》／SE²せ【為SE²・SU^{1,2}の連用形。体言に付いて動詞をつくる。もともと「つかわす・やる・なす・扱う・見なす」などという事がらを進め行なうことを意味する】「助動詞「す」の使役の意とか尊敬の意を表わす。この場合、死ぬの使役形は「しす・しせ」になっているようである。SI²SE²死せ】《死なす。死ぬ。亡くなる。命がなくなる。みまかる。活動しなくて、現実には役にたたない》／TA¹MA¹Fi²給ひ・賜ひ【動詞の連用形の下に付いて、尊敬の気持ちを表わす】《お……になる。……なさる。……てくださいる》／-SÖ¹そ【同句のNA¹に関する説明も参照】／NA³・SI²・SE²・TA¹·MA¹·Fi²・SÖ¹な死せ給ひそ《命がおなくなりにならないように。活躍をせずに、現実にはお役にたたないようにならないうに。態度を死ぬまで取り続けよ。命ある限り努力せよ。お堪えになるようにねがいます。お持ちこたえ下さい。お保ちになればよからう。ご保存下さいませ》

【一句全訳】【おいのちがなくなるまで、ご自分の情緒をお保ち下

さう。】

(13) (17) 伊斯多布夜

阿麻波世豆迦比 (世¹勢・迦¹加)

許登能

【三つの音仮名字母が SK 472—(I)~(M) 句のと、この次の文の中で違うけれども、声調は同じで、解釈も前例の通りにすべきです】

【全歌全訳】【制御できない色欲の最大限を引き起こす活力という所有物を淘汰なさる霊に当たる神聖な天命被恵者よ。手足の力がぬけて、正常に働かなくなつて、腫れ物がちであるような娘であるので、それだから、私としては離れたり動いたりしないように、ここに掛け籠もつたままで居させられて、否でも応でも、じつと坐りつづけるところである。まさに周囲の怨みを集中する住みに囲まれた虜のようぞ！ 確かに神聖な交接中には私は自分の心境によつて行儀作法を守るだろうが、死んだあと、つぎに生まれかわるといふ世には万事はあなたのお心のままになるようであるなあ。神聖な来世に新生する必要な行方は、おいのちがなくなるまで、ご自分の情緒をお保ち下さい。神聖な風が遺恨を取りあげて伝えることや……いや、それは信じえない。言葉を組み合わせる才能を躍動させたり、時宜に叶わせたりするところで、以上のような活躍に相等しいことである何事も中途半端になっていることばであつても、この歌を詠じるものである。】

【コメント】「制御できない色欲の最大限を招く」範囲を司る神

が歌謡の筋道のなかで「高志国之沼河比売」と衝突したことは具体的な場面として観想された話ではないと思つています。多分、大昔の伝説であるヤチホコの神の伝承に含まれている倫理観の欠如という要素に対抗して、何らかの独自の主張、あるいはそれと反対の助言とかの表現の始めとなるものだと思われまふ。その一つは、「コシノクニノヌナカハヒメ」という架空の人物のおそろしい運命に関する雑談であつたのではないでしょうか。その運命とは、意識的にヤチホコの神の担う天命と密接に関係付けられたもので、間違ひなく反対意見という意義をもつていて、上代における観念形態の変化における紛争の事態の一つでありました。「コシノクニノヌナカハヒメ」という人名も、おそらくその闘争の手段として認めてよいでしょう。「高志国之沼河比売」という表記は、もちろんその中身を直接には表示してはいないで、本来の意味を隠す作用を持っています。それは音・訓仮名の表記として、表意されているはずの意味を、声調を応用して解説するようになっていく書記法なのです。それを解説してみると、先ず上代の声調パターンを復原します。さらに

KO³SI²NO²2KU²NI²NO²2NU²NA¹KA²FA¹FI²3ME³を分節化して*
 KO³SI²-NO²K- U²NI²-NO²-NU²M- NA¹-KA²F- FA¹FI¹-ME³↑
 KO³SI²-NO²KE²-WU²NI²-NO²-NU²MI²-NA¹-KA²FI¹-FA¹FI¹-
 ME³になります。それは表意文字で「越し退け埋に去要無代ひ延ひ女」になつたので、現代語訳として「越度のような行為の除去と

か隠蔽とかをしていたところで、規範態度の欠如を更改して満たすことを押しひろめる女性」という意味になります。思うに、これは明瞭に新しい男女関係の模範が生じて、それを普及する使命を担った神の出現を示しているのです。これが「コシノクニノヌナカハヒメ」という名称とこの歌謡の解説から得られた古代日本人の思想です。

上記*の分節化の結果として次の要素が現われます。

・ KOSI³ 「高志」という SK 47.2 の歌謡の前文に使われた表記の地名は、同歌の(F)句に「故志」と改められたのだ。前音の音仮名は多分『古事記』の成立時に用いられたものだったので、まだ声調のことは考慮に入れられなかったために、後者だけが声調の備わった形がある。地名が人名の中に言葉遊びを作るように使われたのだから、その意味は比喩的である。《越礼。越度。落ち度。反則。世の掟からそれること。あやまち。過失。ある標準より上に出ること》

・ NÖKE¹ 退け《除去する。わきへ移す。除く。省く。廃する。除外する。免れる。外す。放置する》

・ WU²NI¹ 埋に《埋みの訛った形。すっぽりと入れて見えなくする。すきまなくおおって隠す。隠蔽する。かぶさって見えなくする》

・ NÖ³↑YI²NÖ³ 去の《去ぬ》の動名詞。完了の助動詞「ぬ」の動名詞。その場から消えて行ってしまったこと》

・ NU²MI² (NU²MA²とも) 要《かなめ。物事の枢要な点。大切な箇所。人間の模範的態度。最大価値のある物》

・ NA¹ 無《なし》の語幹。不存在。不在。不足。欠陥。不如《KA²FI¹ 代ひ《引き換え。取り替え。代えること。改めること。更改すること》

・ FA¹FI² 延ひ《広げる。延べ広げる。引きのばす。張りわたす。押しひろめる。普及する》

・ ME³ 女《女性。婦人。女房》

(¹) SK 63.1 高比売命の阿治志貴高日子根神に関する哀歌

阿米那流夜／淤登多那婆多能／宇那賀世流／多麻能美須麻流／美須麻流邇／阿那陀麻波夜／美多邇／布多和多良須／阿治志貴／多迦比古泥／迦微曾也

(1) 阿米那流夜 'A¹ME²NA^{1,2,3}RU¹YA³

〔従来の解釈〕天なるや 'A¹ME²NA¹RU¹YA²

〔同意分節〕'A¹ME²・NA¹RU¹・YA²

'A¹ME² 天《天上の世界。大空》／NA¹RU¹ 生る・成る《成立する。思いがかなう。望みどおりになる。できる。可能である。許される。許されて降りてくると思われる。さしつかえない。認められ

つる。与えられてる》／-YA²や [SK 47.2-(1)句の -YAを参照]

【一句全訳】【天に許されてこの世に生まれ出たかのような……】

【天に与えられていると言われたような……】

(2) 淤登多那婆多能 'O¹3TÖ¹TA¹NA^{1,2,3}BA¹TA¹NÖ^{1,2}

【従来の解釈】弟棚機G 'O¹TÖ¹ TA²NA²BA²TA¹NÖ^{1,2}

【新分節】'O¹TÖ¹・TA¹NA¹・BA¹TA¹・NÖ^{1,2}

'O¹TÖ¹- 弟「接頭語」《年下の。若々しい。幼い。末の》TA¹

NA¹種《果实の中にあつて植物の発芽するものとなるもの。胚種。

胚芽。たね。さね》／-BA¹TA¹果た↑FA¹TA¹果た↑果て

FATEの派生語・動名詞《終り。最後。結末。成り果て。遠いか

なた。さいはつ。なりゆき。身の行く末。運命。末路》／-NÖ^{1,2}の

[SK 47.2-(5)句の -NÖを参照]

【一句全訳】【天降り人の未熟な胚種の成り行きは……】

(3) 宇那賀世流 WU²NA^{1,2,3}GA³SE³RU¹

【従来の解釈】項がせる WU¹NA²GA²SE²RU²

【新分節】WU²N・NA²GA²・SE²・RU²

WU²N-←WU²NU² 口《自称の代名詞の卑称。自分。自分自身。おれ》[WUNUの語尾-Uの脱落は、次ぐ子音との融合のためである]／NA²GA²和が[和³ NA²GIの未然形。使役形の語尾を承ける必要な形]／-SE² [SK 48.4-(2)句の -SEを参照]／-RU²

[-SEの使役助動詞に次ぐ連体形の助動詞]／NA²GA²・SE²RU²和がせる《心の動揺を静める。穏やかにする》

【一句全訳】【天降り人である我々の心の不安を静めて置くはずだ

が……】

(4) 多麻能美須麻流 TA¹MA¹NÖ^{1,2}MI²SU¹MA¹RU¹

【従来の解釈】玉の御統 TA¹MA¹NÖ¹MI²SU²MA²RU²

【新分節】TA¹MA¹・NÖ^{1,2}・MI²・SU¹MA¹・RU¹

TA¹MA¹魂《精霊。靈魂。魂しい。靈力》／-NÖ^{1,2}G [SK 47.2

-(5)句の -NÖを参照]／MI²↑YI¹MI²忌み・斎み《身を清めつつ

しむ。けがれを避けて清める。物忌みする》[前音節 YI-を脱落す

るのは、一般の略す用法。いまだ↓まだ、いだす↓だす、の類

例]／SU¹MA¹-澄ま「澄みの未然形。自発の助動詞-RUを承ける

ための形]／SU¹MI²-澄み《すき通るようになる。冴える。心に雑

念がなくなる。まじりけのない心に落ちつく。清らかになる。心の

濁りがなくなる》／-RU¹ [自発の意を表す助動詞]《自然に……

れる。……なうではいられない》／SU¹MA¹・RU¹ 澄まる《まじ

りけのない心に落ちつかないではいられない》

【一句全訳】【靈魂のけがれを避けて清める結果、まじりけのない

心にも落ちつかないではいられないところだが……】

(5) 美須麻流邇 MI²SU¹MA¹RU¹NI²

【従来の解釈】御統² MI²SU²MA²RU²NI^{1,2}

【新分節】 $MI^2-SU^1MA^1 \cdot RU^{1,2} \cdot NI^{1,2}$

MI^2 も SU^1MA^1 も $-RU^{1,2}$ もすべて前の(4)句の $MI-SUMA-RU$ を参照。／ $-NI^{1,2}$ に「活用語の連体形に付く接続助詞」《逆接で下に続ける。確定した事実が続く。……けれども。……のに。……ても》

【一句全訳】【けがれを避けて清めたり、清らかになった心に落ち

ついたりしても……】

(6) 阿那陀麻波夜

『 $A^1NA^{1,2}DA^1MA^1FA^1YA^3$ 』

【従来の解釈】六玉はや 『 $A^1NA^1DA^1MA^1FA^1YA^2$ 』
 【問題の語法は、疑いなく分かりにくい一句で、写字生によって多少変化されたのである。誤解のために「アナダマ」は文脈上から下らない成分と認めねばならず、「はや」も、感動・詠嘆の意を表わす用法があっても、全く訳が分からなく、できただけで入れたのであろう。本文を一ヶ所ばかり補って、また一ヶ所の有声音を無声音化して、仮定的に校訂すべきであらう】

【仮定的な復旧句】阿那多麻波米夜 『 $A^1NA^1TA^1MA^1FA^1ME^2$ 』

YA^2

【新分節】 『 $A^1NA^1 \cdot TA^1MA^1FA^1 \cdot ME^2 \cdot YA^2$ 』

『 A^1NA^1 』 穴《掘って作ったくぼみ。自然にできたくぼみ。(また比喩的に) 穴のあけたところ。欠損。損失。損傷》【『岩波古語辞典』によれば、「穴」の比喩的な意義は江戸時代に繁用された

ものだったとのことだが、同辞典にある通り「あなぐり」(探り)

「穴を剝る意」すなわち「穴の中のものを手探りで求める。転じて、さがし求める」さらに「詮索する」という意味。このことばは『日本紀』にも現われて来るので、あの時すでに意味の変化を起こす好機があつて、「あなぐり」の「穴」は「損害」というニュアンスに変わったと思われる方がよからうと考えられる】 $TA^1MA^1FA^1$ 給は 『 $TA^1MA^1FI^2$ 』 給ひの未然形。「 $TAMAFAYA$ 」という言い回しは在り得ないと推定する。動詞の未然形と終助詞「や」との間通常推量の助動詞「む」の已然形「め」を挿入して、反語の用法が出る】 $TA^1MA^1FI^2$ 給ひ「与えるとか授けるの尊敬語」《お与えになる。くださる。御下降_レさる》 $-ME^2$ も [SK 48.4—(8)句の $-ME^2$ を参照] $-YA^2$ や「推量の助動詞「む」の已然形「め」+反語の終助詞「や」の用法」《……だろうか(いや……ないだろう)。……ことがなりそうだが、それは到底信じられないのだ》

【一句全訳】【損害をご下降下さるそうであるが、それは到底信じ

られないほどである】

(7) 美多邇

【従来の解釈】 々谷 『 $MI^2TA^1NI^1$ 』

【新分節】 $MI^2 \cdot TA^1 \cdot NI^2$

MI^2 御【前のSK 47.2—(B)句の MI -を参照】 TA^1 田《たはた。土地。斎田。神田》 $-NI^2$ こ【前のSK 38.6—(c)句の $-NI$ を参照】

「一句全訳」【喪屋の立っているためで不浄の土地としての齋田で……】

(8) 布多和多良須 $FU^3TA^1WA^{1,3}TA^1RA^1SU^1$

【従来の解釈】二渡らず $FU^2TA^2WA^2TA^2RA^2SU^2$

【新分節】 $F \cdot U^2T \cdot TA^1WA^1 \cdot TA^1RA^1 \cdot SU^1$

$F \rightarrow F^1$ 火《炎。熱や光を伴って、ものを焼き、燃やすもの。

火事。あかりの火。雷電。いかずち。かみなり》／ $-U^2T \rightarrow -WU^2$

TA^2 転《やたらに。無闇に。無性に。手当たり次第に》／ TA^1WA^1

撓《しなうさま。ゆがむさま。たわむさま。たわわ。おれまがるさま。

曲がるさま。屈折線状に。稲妻形のように。ジグザグに》／

TA^1RA^1 垂り「垂りの未然形。助動詞 $-SU$ を承けるために」／

TA^1RI^2 垂り《したたる。したたり落ちる。降る。落ちる》／ $-SU^1$

す「動詞の語尾として四段に活用し、動詞未然形に接して、敬意ま

たは親しみの気持ちを添え、敬語動詞を構成する。この $-SU$ は、

サ変活用にも接するほか、また $MIRU \rightarrow MESU$, $KIRU \rightarrow KESU$,

$SINU \rightarrow SISU$, $NU \rightarrow NASU$, $KOYU \rightarrow KOYASU$, $KIKU \rightarrow KI-$

$KÖSU$ 等の形をとる」

「一句全訳」【火をやたらに出して、貴方は稲妻の形を帯びて、天

上からお降り落ちになられている（それは如何せんとも

致し方ない）】

(9) 阿治赤貴 $'A^1DI^{1,3}SI^3KI^3$

【訓釈はなし】「ADISIKI」という音仮名文字連は高比売命の兄

の神託含有名の前部をなす。後部は(10)句に挿入されている」【西宮

一民氏の「神名の釈義」によって、訓釈は「味鉏高日子根」で、

「鉏」が「しき」と発音が変わったただけのことで音節結合の法則に

よる。ところが、志貴は $SIKI^1$ 鉏は $SUKI$ で、母音「う」の

甲・乙類の差別であるから、以上の結合説は成立し難い。 $'A^2DI^2$

SU^2KI^2 の声調パターンも不充分だ」

【新分節】 $'A^1T \cdot DI^1 \cdot SI^2K \cdot I^2$

$'A^1T \rightarrow 'A^1TÖ^2$ 跡・後《うしろ。以後。のち。過去。死後。直

後》／ $DI^1 \rightarrow TI^1 \rightarrow WU^2TI^1$ 内・中《奥のほう。中のほう。内部。

内がわ。仕切った線の手前。範囲内。心の中》／ $'A^1DI^1$ 跡内「おそ

らく $'ATÖ \cdot WUTI \rightarrow 'AT \cdot TI \rightarrow 'ATI \rightarrow 'ADI$ という音便だ

ろう。最後の段階 $'ADI$ は多分「味」との同化。 $WUTI$ の $WU-$ の

脱落は $WUMU \rightarrow MU$ の類」《死後の内実。死後の世界。死んだあ

との事実》／ $SI^2K \rightarrow SI^2KI^1$ 及び《たとり着く。追いつく。及ぶ。

とどく》／ $I^2 \rightarrow ÖI^1 \rightarrow ÖFI^1$ 追ひ「音声論上 $ÖFI$ の発音は $-F-$ の

脱落の結果、母音の接触が起こったので、音韻変化が生じる。 $Ö+$

$I \rightarrow I^1$ 。通常、二語の接触の類が多い、例えば、 $ÖFÖ + YISI$ 大石

$\rightarrow ÖFÖ + ISI \rightarrow ÖFISI$ 」

「一句全訳」【死後の生活環境までも悪人に追いついて……】

(10) 多迦比古泥 $TA^1KA^1FI^{1,2,3}KO^2NE^{1,3}$

〔従来の解釈〕高日子根 $TAKA\dot{F}IKO^2NE^1$ [この以上に見える表意文字は西宮氏による]

〔6〕句に載せた神託含有名の前部を解釈したから、ここは同名の後部に移る]

〔新分節〕 $T \cdot A\dot{K}A\dot{F} \cdot FI^2KO^2 \cdot NE^1$

$T \rightarrow YI^2TA^2$ 甚 [YIの脱落は「イダス→ダス」の類。 $TA^2 + A\dot{K}A\dot{F}$ の接触の結果、二重母音 $A + A$ が単母音化される] 《極限・頂点・甚だ・ひどく》 $\rightarrow A\dot{K}A\dot{F} \rightarrow A\dot{K}A\dot{F}I^2$ 贖ひ 《あがなう。償う。つぐないをする。罪はろぼしをする。うめあわせをする。仕返しする。報いる。報復する》 $\rightarrow FI^2KO^2$ 引こ [引きから派生した動名詞。 FI^2KO^2 の形も同義であろう。SK 47.2—(B)句の $FIKO$ を参照] $\rightarrow NE^1 \rightarrow YI\dot{N}E^1$ 出ね [仮定的に「出で」の子音交替と認め、ハナハダがおそらくハダハダからなった重ね詞の類。「去」イニの同根か] 《姿を見せる。外に出る。出現する。そのこと。そのところ》

〔一句全訳〕【やたらな残酷な報復行動を取って出現するとの…

…】

(11) 迦微會世 $KA\dot{M}I\dot{S}O^1YA^2$

〔従来の解釈〕神そや $KA\dot{M}I\dot{S}O^1YA^2$

〔同意分節〕 $KA\dot{M}I\dot{S}O^1 \cdot SO^1 \cdot YA^2$

$KA\dot{M}I$ 神 [先6 SK 47.2—(B)句の $KAMI$ を参照] $\rightarrow SO^1$ そ

〔係助詞。他の何物でもなく、まさにそのものであるという意味での強調を表わす] $\rightarrow YA^2$ や [間投助詞。感動・詠嘆を表わす] 《……なあ。……よ》 $\rightarrow SO^1 \rightarrow YA^2$ そや [やさしく言ひふくめる意を表わす] 《……だよ。……だなあ。……と感じられることだ》

〔一句全訳〕【神霊でいらっしやることを戒めておきたいなあ。】

〔全歌全訳〕【許されてこの世に生まれ出たような天降り人の未熟な胚種の成り行きは、天降り人である我々の心の不安を静めておくはずだが、靈魂のけがれを避けて清める結果、まじりけのない心にも落ちつかないではいられないところだが、けがれを避けて清めたり、清らかになった心に落ちついたりしても損害をご下降下さるそうであるが、それは到底信じられないほどである。喪屋の立っているために不浄の土地とされる斎田で火をやたらに出して、貴方は稲妻の形を帯びて、天上からお降り落ちになられている（それは如何せんとも致し方ない）。死後の生活環境までも悪人に迫り着いて、やたらな残酷な報復行動を取って出現するとの神霊でいらっしやることを戒めておきたいなあ。】

〔コメンツ〕この歌のあとの文句は、「此歌者夷振也」と書いてある。それは太安萬侶の書き加えてはないかと思われる。私の考えでは $FINA \cdot BURI$ 夷振り、すなわち「田舎の歌曲」は、誤読の表記ではないかといえる。『岩波古語辞典』でも「歌詞から名づけた

ものか」と疑わしそうに解説する。誤解の表記の見地からも、声調パターンからも、不揃いのままであるから音声論に基づく私見を述べることはできないが、仮定的に言くと「ヒナブリ」は多分「ウ

ヒ・ナブリ」の訛った「ヒ・ナブリ」という形だ。その意味は《初擾り、とか、初騷り、とか》で、「異例の騒ぎ(紛争・揉め事)」になるべきである。そのような中身は、歌詞と密接な関係がある。逆に、誤訳である「天にいる機織女」についての昔話は、例の「神のもめごと」とは一言でも何の連想がない。更に問題の歌の前に「高比売命思顯其御名」と書いてある。その上、高比売というあだ名も「タカヒコ」の対であるといってもいいが、「高日女《高く輝く雷の女性》(西宮氏の説)ではなく、まず「日」を「雷」にする考えもFi対Fiの差別であって、言語学の見地からは誤りと見なすはずであろうと思う。タカヒコは、以上にT-AKAF-FIKOと分節すべきで、対であるタカヒメもT-AKAF-IM-ME↑(WU)T(A)-AKAFI-YIMI-ME 転贖忌女、すなわち「やたらな贖ひ忌み女」・「やたらな報復をきらったりさけたりする女神」であると推定するのがよいでしょう。タカヒメとタカヒコと言うのは、実は「やたらな報復行動の伝播」と「やたらな報復行動の離脱」という二つの社会関係の傾向がこれで表わされている。前者は旧社会の統一の重要な原理であつたけれど、時が経つにつれて、不可欠性は衰えて行つて、より人道主義の手段が必要になった。タカヒコの妹タカヒ

メは新社会の見解の先駆者となつて、まだ小声で歌うと思つても、それは人生観の非常に大きな変更を予告する日本文芸の韻文の一片である。

第五部 概要

(一) 筆者は、「古事記」の歌謡数首の本文を、それに備わっている原音声調を考慮して、それらの伝統的な漢字仮名交じり文と比較した結果、双方が声調の面から見て大分異なっていることを発見しました。

(二) しかしながら、声調が合致するかしないかだけではなく、比較研究によって内容もある程度よく文脈と調和しているという古代の表記の達成を観察することができる、というところにも本稿の成果があります。

(三) とにかく、筆者の考えでは、太安萬侶は、やや不明瞭ではあつても、すでに序文の中で、音仮名にとくに目をつけていたわけですが、文章があまりに長くなるので、音と訓とを同等に扱いました。すなわち、両方とも字義の如何にかかわらず、ただその文字の読み方を使って書くことを国語を写す方法にすると決意しました。

(四) したがって、歌謡の解説の手掛かりを辿るこの作業は、訓仮名の扱いの理解を深める結果にもなりました。

(五) 音仮名と訓仮名の語法は、本文の骨組みをなす漢文体と比

べて、最大の困難を示しますので、その語法に精通すると、『古事記』の読解の面倒な難点を解消する希望が湧いてきます。

※本稿は、同題で一九九四年十一月二十四日にワルシャワ大学で催された国際会議の際に簡略化した形で報告した講話を基にしたものであります。

会議名：Warsaw Symposium on Japanese Studies

[Section: Japanese Literature, Theatre and Poetics]

会議の主催者：University of Warsaw

簡略な報告の発表予定期日：一九九七年末ごろ。

刊行書題名：To Commemorate 75 Years of Japanese Language Teaching at the University of Warsaw. Proceedings of the Warsaw Symposium on Japanese Studies

※なお、本稿がこのような形で公刊されるに際して、大阪国際大学の松井嘉和教授の多大な協力を得たことを記して、謝意を表します。

注

- (1) 引用書目は、末尾の参考文献一覧に明記。
- (2) SK73 という表示は、引用の文献とその箇所を明示した記号です。SK とは真福寺本古事記という意味で、本稿では影印本（桜楓社刊）を使用し、SK の次の数字はそのページで、その後の数字は、当該ページの縦書きにされた文字の行数です。つまり、SK73 はその影印本の七頁の三行目ということです。

(3) 参考文献は本稿の末尾に掲げましたが、八種とは、その中の次の文献のこと。

青木・石母田（一九八二）、西宮（一九七九）、西郷（一九七六）、荻原・鴻巣（一九七三）、丸山（一九七〇）、倉野・武田（一九五八）、倉野（一九五七）、次田（一九四三）、

参考文献一覧

- (1) 「国宝真福寺本古事記 影印本」桜楓社 一九七八
- (2) 青木和夫・石母田正 「古事記 日本思想大系1」岩波書店 一九八二
- (3) 荻原浅男・鴻巣隼雄 「古事記・上代歌謡 日本古典文学全集」小学館 一九七三
- (4) 倉野憲司 「古事記大成 六本文編」一九五七
- (5) 倉野憲司・武田祐吉 「古事記 祝詞 日本古典文学大系1」岩波書店 一九五八
- (6) W・コタンスキ 「古代文化伝来原本の解釈の諸問題」、「文化言語学 その提言と建設」明治書院 一九九二 所収
- (7) W・コタンスキ 「『古事記』の主人公達の道德的行為に対する一考察」（上・下）「神道及び神道史」神道史学会、四八号 一九八九、四九号 一九九〇 所収
- (8) 西郷信綱 「古事記注釈 二」平凡社 一九七六
- (9) 高山倫明 「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」、「語文研究」五一号 一九八一 所収
- (10) 高山倫明 「日本書紀の音仮名とその原音声調について」、「金田一春彦博士古希記念論文集 一」一九八三 所収

- (11) 次田潤 「古事記新講」 明治書院 一九四三
- (12) 藤堂明保 「学研 漢和大事典」 学研 一九七八
- (13) 西宮一民 「新潮日本古典集成 古事記」 新潮社 一九七九
- (14) 丸山林平 「校注古事記(完)」 武蔵野書院 一九七〇
- (15) 望月郁子 「類聚名義抄 四種声点付和訓集成」 笠間書院 一九七四
- (16) 本居宣長 「古事記伝 四」 岩波文庫 一九四四